犠牲の心

一　ダヌンチオの「犠牲」

ダヌンチオの小説に「犠牲」と題する名著がある。一寸話の筋道を云へば、或る若い戀仲の夫婦があつて、仲好く暮してゐる内に、如何なる機會(はづみ)でか、夫が外に情婦を拵へた。妻は之を覺つて夫婦の仲は益々水臭くなる。彼女は屢々之を諫めても彼は聞き容れない。妻は遂に病に罹つた。病める妻には益々愛想を盡かして彼は頻々と情婦の許に通ふ。病聊か怠りし時、或日夫は例の處へ出掛けようとしてゐる。妻は今日ばかりはと泣言を云つて歎願すれど、彼はすげなく振棄て往つてしまつた。妻の苦悶は察するに餘りある。嗚呼されど斯程まで

彼女の切なる情愛を無視せる夫に對して、妻は何時までも貞節なることは出來なかつた。彼女が日頃崇拜せる或小説家は何時しか彼女の情人となつてゐた。夫は之を嗅ぎ付けても、お互に不義を働いてゐる仲で、何んで他方の罪を咎むることが出來よう。兎角する内に我が妻は胎んだ、そは小説家の胤を宿したのである。驚いたのは夫よりも彼女自身であつた。然り、彼女は今や自分の不義を恥ぢて煩悶し始めた。彼女は屢々自殺を企てた。それと覺つた夫はもとより自分の不義が妻を誤らしめるにいたつた動機であるから、妻の不貞は憎むべきも、其不義を後悔して煩悶せる妻に同情し初めた。而して遂に彼等二人は互に他方の罪を宥し、昔の熱烈なる青春の戀に歸つた。嗚呼されど取り返しの付かぬのは不義の結晶、彼女は月滿ちて一子を擧げた。彼等は昔の愛に歸つても、此子に對して彼は無限の憎惡を感ぜざるをえず、この憎惡は間接に夫婦の情愛

を妨げた。されば彼は如何にしてか、此子を亡きものにしたいと企て、人目を盗んで之れを殺した。その子は即ち彼等夫婦の情愛の爲めに犧牲（サクリフヤム）となつたのである。

犧牲に二種あり。一は自から他の犧牲となること、他は他の人を自分の犧牲に供することである。此男が自分で先づ不義を働き、妻に對する貞操を破つて置きながら、妻の不義を生じた結果に對して妻が自分を恕したほど妻を恕さず。妻が如何に其の子の爲めに苦んでゐるとは云へ、自から其子を憎まず、却て彼女を慰め、己が實子よりも一層之を愛養してやることが眞に妻を宥し、且つ彼女を愛する所以である。然るに今これを殺した彼は、自から妻の爲めに犧牲にならうとはせずして、罪なき第三者を自分の爲めに犧牲に供したのである。

二　メエテアリンクの「モナワナ」

之れと反對のお話で、メエテアリンクの「モナヲナ」では、美はしいヲナが最愛の夫に對して彼に濟まぬけれど、ビザ三萬の生靈を救はんが爲めに、敵將の要求を容れて、彼の陣屋に微行しようとしてゐる。夫は自分の生命よりも愛してゐるヲナを人手に渡すことは出來ぬと云ふ。ヲナも夫の苦悶を察してゐるが、此場合敵將の條件を聽入れなければ、ビザ三萬の人民を見殺しにせねばならぬ。彼等の生命は今や全たく敵將の手に落ち、彼等の慶殺は旦夕に迫つてゐる。ヲナの貞操と三萬の生命！　嗚呼その孰れを擲つて孰れを全ふすべき？

そは誠にヲナの夫に對する最大の難問であつた。彼は斷然意を決して曰く、三萬の生靈を慶（みなごろし）にするも吾が最愛の妻を犧牲に供するのは厭やだと。されど他く

まで貞操なるワナも、飽くまで夫の心情を汲み知れるワナも、三萬の生靈を救はんが爲には吾身のこと、夫のことを考ふる暇はなかつた。ビザ三萬の人民を擁護すべき地位に立てる夫をして、其義務を全ふさせるには、吾身獨りの汚辱何の厭ふ處か之れ有らんと、ワナは挺身敵將の陣屋に赴いた。吾等は今この話の結末まで聽きたゞす必要はない。されど誰れかワナの心情を思ひて涙なき者ありや。彼女は三萬の生靈を救はんが爲めに、婦人の最も尊ぶべき貞操を擲つてまでも人身御供に上らんとしたのである。

三　ウイスコンシンの疑獄

犧牲とは何ぞや。己が愛の爲めに他人を犧牲に供せしダヌンチオの男と、三萬の同胞を救はんとする愛の爲めに、挺身自らを犧牲にせんとしたメエテアリ

ンクの女と、其孰れが貴き、其孰れが美はしき？　近頃問題となつてゐる米國シカゴの附近レエキフオレスト高等學校の一女生がウイスコンシン大學の一男生に毒殺されたと云ふ事件がある。事の眞相は事件發生以來、既に半歲の裁判沙汰となつても未だ判明してゐないが、諸新聞の報道を以て事實の影を攫めるものとすれば、そは容易ならぬ大疑獄である。此婦人と此男とは嘗て相思の仲であつたが、此男が後日他の婦人に通じ、前の女を如何にかして振り棄てんと思へる矢先き、其女の今や容易ならぬ身なるを聞き、斯くては今の戀しき婦人を棄てゝ、最早や厭になつた女と公然結婚しなくてはならぬのか。嗚呼實に馬鹿〳〵しい、一層のこと彼女を亡き者にせば自分は安全に今の女と一所になることが出來ると思つて、前の女を密に誘出し、下劑だと詐て毒を仰がしめ、即座に彼女を殺したのであると。男性の威信を蹂躙せるかくの如き行爲の全く信實な

らざるを私は願ふのである。されど其女が此男の足下で死に絶えた事は既に男の白狀した處で、萬一この疑獄が世間の想像通りに發展して、其極惡非道の罪惡が天下百萬の男子をして色を失ひ、あらゆる女性の前に低頭平身して男性の罪を謝せしむるに至るか、未だ俄に最後の結論に到達することは出來ぬ。が、彼の男が此の女を直接毒殺しなかつたにもせよ、彼女をして失望の極毒を仰ぐに至らしめた彼は、彼の道義的責任を免かれることは出來ぬ。彼との關係の結果、彼女は非業の死を遂げたりとせば、彼も亦、毒を仰いで慚死すべきではないか。而も彼れは己が足許に彼女は斃れたりといふ事實を既に告白せるにも拘らず、尙牢獄に繫がれて、只管其の下手人でないことを主張してゐると、何んとづう〳〵しい鐵面皮の男ではないか。又彼の無罪を擁護せんとて一時は盛んに聲援運動をなせしと云ふウイスコンシン大學の學生等は果して狂せるのではなかつ

たか。彼等が道義の光何れにありや、彼等が情緒の閃き何れにありや。よし此男が直接下手人でなかつたにもせよ、彼れの戀人が彼に棄てられて毒死するに至りしは掩ふべからざる事實で、謀殺事件は別問題とするも、彼が彼女に對する不節操と、彼が彼女の死を顧みずして只自から辨護せんとする其男性にあるまじき卑劣の態度に對して、聲援擁護せんとせしウイスコンシン大學の學生等は彼と同樣卑劣の奴原である。否な〳〵、自からの不行跡によつて一人の可愛らしい十八の乙女を死に至らしめた彼は、少くとも精神的に極惡非道なる彼女の毒殺者であつて、彼を辨護せんとするウイスコンシン大學の學生は憎むべき彼れの共犯人である。

犧牲とは何ぞ、私は再び之を問ふ。此男若し聊かにても犧牲の精神を持つてゐたならば、如何に新らしく得し戀に熱中してゐても、故の女の身の上の大事

と聞いては、自己の責任を感じて今の女を捨て、須らく彼女に歸るべきである。そは甚だ難いことであらう。一旦愛の無くなつたものを、目前の熱愛を棄てゝ故の白らけた愛に歸ることは頗る困難であらう。人は名譽も財産も地位も權勢も容易に犧牲に供し得るが、戀の犧牲は最も困難とする處であらう。而も自己の責任を感じて此最後の犧牲を拂ふ、其處に云ひ難き人生の美があるではないか。

四　生存競爭と犧牲の心、自然生活と精神生活

人は云ふ、此世は生存競爭の世の中であると。弱肉强食、優勝劣敗は社會の條理である。見よかの蚯蚓を取らんとする雀、此雀を窺つてゐる蛇、此蛇を喙かんとする雉子、此雉子目がけて走り來る狐、此狐を攫まんとする鷲、此鷲を

追はんとする獅子、此獅子を討たんとする獵夫、嗚呼これ宛然たる弱肉强食の原理を例證するものではないかと。然り、自然の在りの儘なる生活は弱肉强食であらう、自我中心の生活であらう。他人他物の盛衰榮枯は我が關する所にあらず、出來得るだけ他人他物を利用して自分の欲望を滿足させれば、それで澤山だ。禽獸蟲魚の生活は多く斯樣であらう。勿論彼等とても同族に對する愛他的行爲は本能的にやつてゐる。然も之を自覺して益々愛他的に發展しようとは自から努力してゐないやうである。少くとも人間は之に反して、自我中心の自然生活を脱却し、意識的に愛他的共同生活を送らんと努力してゐる。これ人類と他動物との截然種屬を異にするに至つた所以である。これ人類が萬物の靈長として自尊自重し得る獨特の理由である。

そは必ずしも人間本來のものと見る必要はない。そは不自然であつても差支

ない。若しそが不自然だからとて自然生活に歸りたければ歸るがよい。岩野泡鳴や一派の人々が主張する如き野獸主義に歸るがよい。そは只進化の道程を逆戻りして、大人でありながら何時までも小兒らしい生活がして見たいと思ふやうなもので、人間生活が餘りに大き過ぎるやうだつたら單純な、本能的な、併し野卑な、ちつぽけな野獸生活になりと、半獸主義になりと歸るがよい。そんな弱蟲が人間の仲間入は眞平御免だ。或者は曰く、吾等は人間生活から離れたくはないが、愛他心の根源を尋ぬれば餘り有難くもないと。然り、彼が批難する如く、愛他心の根元は自我心であるかも知れぬ。而も既に愛他心となつた以上、そは自我心とは別物である。進化學者は曰く、花は葉の變形であつて、眼窩は毛穴の變形であると。然も花が葉の一變形なるが故に美しくないと云ふ者は一人もあるまい。眼球は毛の一變形なるが故に事物を視るの價値なしと云ふ

やうな馬鹿者は一人もあるまい。されば、よし愛他的犧牲の精神が自我心の一變形であつたとしても、既に犧牲の精神たる以上は、其美其善、吾等の稱讃を値ひすべきではないか。

五　犧牲の精神の發展と文明の根柢

『犧牲』とはもと宗教上の言葉であつて、神に犧(いけにえ)を捧げて神の恩惠を願ひ、五穀の豐穣を祈る者は穀物を神に捧げて之を求めてゐた。其動機は結局自我的である。神を釣らんとするものである。そは一種の賄賂だ。しかし斯くの如き賄賂を贈りて尙其賄賂なるを知らなかつた時代は所謂野蠻の時代で、勿論何等文物の見るべきものはなかつた。後日『犧牲』は物質的の對償を求むる爲めではなく、罪に對する神の怒りを和けんとする贖罪祈願の象徴として大に精神化され

た。乍併自分の罪を贖はんが爲めに、或は神の靈的祝福を得んが爲めに、他人他物を代償とするが如きは、未だ高い道義心の發露と見ることは出來ぬ。今日の鋭敏な良心の權威をもて判斷すれば、そは寧ろ滑稽である。されど人類の愛他心は限りなき發展を遂げ、神に捧げる犧牲の最も大なるものは、自分の家畜ではない、財産ではない、『自分自から身を殺して仁をなす』ことであるとするに至つた。斯くて人類は其自然的野獸的自我心の繫縛から脫出して、精神的人間的大我の生活に赴きしこと蓋し幾何なりしかよ！

パスカル曰く、絶世の美人クレオパツラの鼻が半寸も低かつたならば、世界歴史は全然其進路を他に轉じてゐたであらうと。吾等は眞面目に且つ謙遜に云はん、イエスの殉教的犧牲の死がなかつたならば、クリスト教は起らなかつたであらう、而して今日の精神文明は恐らく實現されなかつたであらうと。ソクラテスの毒杯、バウロの刑死、サヴオナロラやジャンダアークや、フスやクランマアの火刑がなかつたならば、人類の精神生活は今日如何に見すぼらしいものであつたであらうか。古より犧牲的殉教者の血は火と燃えて萬民の熱情を湧かしめ、高遠な理想、主義、本領の爲に犧牲の死を遂げて以て靈性の威嚴を示し、後に來る多くの偉人英雄を鼓吹した。奮勵した。かのルシタニア號沈沒の當時、米國の或る富豪が目前一婦人の死を憐みて、彼女に自分の救命帶を讓り、從容自若として海の藻屑と消えたと、何と美はしい英雄的の行爲ではないか。

六　犧牲の責務と自己奉獻（セルフコンセクレエション）

吾等が常に犧牲の精神を涵養すべきは、單に人類の向上、靈性の發展の爲めのみではない。自分自身直接の責務である。吾等は此世に生れ來て既にどれだ

け他人他物を犧牲に供してゐるか分らぬ。そは單に禽獸草木を吾等の食餌として既に莫大の犧牲としたばかりでなく、只死亡率の關係から見ても、多くの子が生れて成年に達する者は其一少部分に過ぎず、他の者は死して吾等殘存者に席を讓つてくれたのである。只家庭の關係より云ふも、父は我れあるが爲めに思ふほど社會に活動することは出來なかつたであらう、母は我が爲に多くの欲望を擲つて只管愛養にこれ務めたであらう。其他社會一般の人々に對して職業上、友誼上、政治上、吾等はどれだけ不知不識の間に他人他物を犧牲に供してゐるか分らぬ。之に對して萬事犧牲の精神を以て生活しようとするは理の當然であつて、今や人生の免かれ難き本務となつてゐるのである。

吾等の所謂犧牲とは必ずしも身を殺すことではない。自分の生きた生命を捧げて社會に奉仕することである。人生最高の理想に忠實なることである。そは

英語のサクリファイス(Sacrifice)即ち犧牲よりは寧ろ神の御意(こころ)に吾等の生涯をコンセクレエト(Consecrate)即ち奉献することである。百姓であれ、商人であれ、公吏であれ、勞働者であれ、私心私利を顧みずして只管社會奉仕の理想に忠實なる者は皆夫れ神の御意に彼等の生命を奉献せる者である。イエス曰く、親を棄て妻を棄て子を棄て、自分自身を棄てゝ我れに從へと。蓋し、凡ての自我的欲求、自己充足の歡樂を擲つて人類の向上、社會共同の福祉に奉仕せよと云ふに外ならぬ。願くば吾等をして斯の如き犧牲の精神を以て日々の生活にいそしましめよ。そは誠に甚だ六ケ敷いことであらうが、偉大なる生命の眞味を味ひ、久遠の靈性を發輝せんと願ふ者は、片時も此犧牲的な愛の心を失ふてはならぬ。

國家と社會

一　主權の所在

故服部代議士嘗て私の寓居を訪ひ、其談話の一節に曰く『日本では獨り國家の觀念のみ强くして未だ社會の自覺がない。否な、ないではないが、社會は國家より狹義のもの、淺義のものと解せられてゐる』と。宜なる哉、或る帝大出の學士が私の「國家の眞意義」を讀みて直に反問を起した。彼は私が國家は一の會社組織であつて、其の機關たる政府は一の營業に過ぎぬとせるを非難して曰く『國家と職業制體（ビジネスインスチチユション）との差別は主權の有無にあり』と。一應尤もだが、彼は主權なる語を以て何を意味するのであらうか。若し國家に絕對權ありとの

義ならば、お氣の毒ながら國家は世界に只一個でなくてはならぬ。絕對なるものは一とつ以上此世に存在することは出來ぬ。而も見よ、彼れの所謂國家なる絕對者が日、米、獨、英、佛、墺等現に數十存在してゐるではないか。これ明かに國家は大なる社會の一部分であつて、主權（絕對權）の在所にあらざることを示すものである。

强ひて主權の所在を衝き止めよとならば、私は社會にありと云はん、人類全體にありと云はん。これ社會を一個の實在と見、社會に夫れ自身の意志ありとなす、ハアヴアード大學教授ロイス博士の所謂忠義哲學の主張である。併し人類全體が世界の凡てゝはない。人類は只無限の宇宙に散在する無數の星辰の內で、いと小さきものなる地球の住人に過ぎないから、人類全體より成る社會に主權ありと云ふも未だ徹底した言ではない。然り、主權ー國家になく、社會に

なく、宇宙全體にあるかも知れぬ。若し宇宙を創造し、人類を統率し、人道を擁護し給ふ獨一の神ありとせば、彼れこそ宇宙の主權者(ソヴエレン)であつて、全人類社會の上に絶對の命令權を持ち給ふであらう。彼れ以外絶對權即ち主權を持てる者は誰もない筈である。然らば如何にして國家主權說が起つたか。歷史上から之を云へば、中世紀の國王達が自己の專權を恣にせんが爲に、統治權を神聖化して人民を威服し、宇宙絶對者の獨有なるべき此命令權を獨斷的に彼等のものだと僭稱せしことから來つた小說的虛構說を、近世の政治學者が阿諛的に其儘踏襲したに過ぎぬ。

二　良心の聲は神の聲

絶對的命令權が國家になくして宇宙の絶對者にありとせば、吾等は如何にして其命令を知ることが出來るか。若し國家に有之とせば政府の發表する律法により容易に其意志を知ることが出來るが、宇宙の絶對者には目に見ゆる意志表示の機關がないから、そは不可能ではないかと、諸君は詰問するかも知れぬ。安んぜよ、大に之れあり。最も確實なる其意志表示の機關は社會的に發展した吾等の良心である。個人々々の道義的宗教的精神生活に顯現する良心の聲卽ち神の聲である。或者は云はん、良心なんか當にならぬ。個人々々の間に於て其深淺强弱の度あるのみならず、或る場合には所謂良心の麻痺せる者が少くないから、國家に本來主權なくともそを假定して、國家が善とし惡と見る處を客觀的に明示し、之によつて人民の行道を律する、これ一の便法であつて國家制度の存在する所以ではないかと。誠に一理ないでもない。乍併吾等が日常の行爲をなすに當つて、自己の良心が肯定せぬことでも、そは國家の命令なるが故に

服從すべしとして之を爲さば、如何せん、そは僞善である。假りに斯る僞善も善なりとして、吾等は己を空うして、只政府の律法に服從することを務めたならば、恰も新約時代のユデヤ敎に於けるが如く、外飾主義、律法主義に陷り、何もかも外來の權威に盲從する牛馬主義となり、人生の道義的精神生活は空虛になつてしまうであらう。而して結局は國家の爲にも自己の爲にも善果を結ばず、却て害を醸すに過ぎぬ。

口には忠君愛國を稱へて實は私利を貪り私腹を肥やさんとする公吏や軍人が日本の社會に多く、彼等の贖職事件や破廉恥罪が頻々として暴露されるは何故であらう？　そは畢竟明治の敎育が精神敎育宗敎敎育を重んぜず、良心の發達を圖らずして、只管に國家主義、政治主義、律法主義の敎育を施したからである。徒に忠君愛國の形式に囚はれた國民を作るに急にして、自主獨行、自任自

重の人格を養成する事を怠つてゐたからである。そは個人的に責任ある內的生活の充實をはからんことを務めず、只外來の功利的要求に迎合するやうな人物を養成せんと務めたからである。斯くて明治の敎育は法律の明文さへ違反しなければ、どんなことをやつても自由だと思ふやうな人、カツプの外側さへ奇麗に磨き置かば內部には何が這入つてゐようとも敢て問ふ處にあらずと云ふやうな人、卽ち外界に權威を認むる律法主義、外面主義の人物を澤山製造することに成功した。道義的宗敎的良心の聲を蔑視して、寢ても醒めても『國家々々』を口癖に云ふ法政主義の人に、却て國家を害毒する過失、或は罪惡が多いのである。斯くても尙吾等は國家至上主義を遵奉すべきであらうか。

三　內界の權威と社會生活の動力

良心の聲は神の聲である、宇宙の主權者の聲である、命令である。良心は主我心ではない。少くとも利己心ではない。良心は自己と他我一切との關係に正解を與へるものである。イエスの比喩を以てすれば、我(個人)と我が父(神)と我が兄弟(人類全體)との間に相互的信愛の義務あるを認めて、初めて良心の私語が起るのである。ロイス博士の如く、此靈的交通、此相愛の關係にある神と人類全體とを綜合して宇宙的社會(ユニヴァサルコンミュニティ)となし、之に忠節を盡すを以て個人の本務なり、人生の眞義なりと見るも敢て不都合ではない。併し此宇宙的社會は由來人類全體を抱容するものであるから、國家と同一ではない。國家以上の實在である。國家は單に此社會の一部分に過ぎぬ。若し國家に忠ならんとして、同時に此世界的大社會に忠なる能はずとせば、國家に對する忠義を犧牲にしなくてはならぬ。そは恰も家に忠ならん、卽ち親を養はんとする義務を感ずるも、國家

の爲には身も家も犧牲にしなくてはならぬ塲合あると同樣である。

要するに良心は自己を沒却して國家とか社會とか云ふ外界の權威に隨從する心的態度ではなく、自己を世界大に押廣げて全人類を抱擁し、否な、カアライルの所謂『宇宙を抱擁して之を暖めん』とするやうな努力の底から湧き出づる愛の光に照された至上命令(カテゴリカルイムペラティヴ)である。吾等は玆に主權の所在を認めて、前後撞着矛盾なき統一ある道義的精神生活を營むことが出來るであらう。道義的精神生活、そは仙人の孤獨生活ではない、僧院の默想生活ではない、學者の空想生活ではない。そは吾等が日常の平民的社會生活に於て實現すべき淸愛の生涯である、信仰の生活である。

四　歸化問題と世界主義

終に一言したきは、國家と社會の輕重問題に直接の關係ある歸化權問題である。米國に在る日本人が歸化したいと云ふ。若し國家に絶對的命令權あり、國民に絶對從服い義務ありとせば、歸化は權利の拋棄ではなく、義務の罷脱を企つる不忠の行爲である、國家主權說の容る能はざる大罪である。若し便宜の爲め(法律家は常に便宜を口にする)國籍法を設け、國家が自ら主權を制限し國民の負ふ義務を勝手に脱却し得る權道を作つたとしたならば、そは偶ま以て國家に主權なきこと、或は其主張する主權は主權と稱するに足らざるものなることを白狀するに外ならぬ。同時に國民はルソオの唱へし如き契約によつて一國籍を脱して、他の國籍に入り得ることを示すものではないか。然るに各國家が人類社會に對するは、恰も各縣、各州が其國家に對すると同じく、國家は社會の一部に過ぎないから、青森縣人が長崎縣に轉住し、地方的市民關係を異にする

も尙日本國民たるが如く、また日本の國籍を脱して米國籍に入り、國民關係を異にするも尙人類社會の一員たるを失はぬが如く、歸化は國家以上の大社會の存在を認めて初めて成立し得るものである。

私は屢々米國で歸化せんと欲する日本人に其理由を問ふた。或者は曰く、市民權を持つてゐると何かに付け好都合だからと。或者は曰く、大和民族發展の爲め是非必要であるからと。憐むべし彼等は自己の利益を中心として歸化權を得んとするのである。私は叱呼して曰はん、かやうな日本人に對しては決して歸化を許るしてならぬ、そは僞善者を作るのみであると。今青森縣人が長崎縣に籍を移して『私は青森縣の發展を圖らんが爲に斯くなせり』と言はゞ、そは狂氣の沙汰として一笑に付し去るであらう。而も見よ、米國に歸化せんとする日本人にして、眞に歸化して忠良の米國市民たらんとはせず、單に大和民族の

發展の爲めなりとするものあるに對して、敢て滑稽だと思はぬ日本人の多々なるは誠に不思議ではないか。所詮そは國境を超越して、人類平等の理想に立てる世界的社會の實在を明に認識してゐないからだ。吾等若し狹義の愛國心を脱却して、常に全人類を一團とせる社會の一員たることを旨とせば、假令ひ米國人となるも、日本人となるも、そんな地方的民族的利己心に囚はれることは決してない筈である。

歸化は決して利己の爲めではない。故國との交通遠かりて、住國に對する義務責任の感に堪へず、國籍を轉ずる方、一層能く人類社會の一員としての權義を果たすことが出來、全人類の福祉と向上に貢献することが出來ると信じて始めて之を爲すべきである。吾等殊に在米の日本人に向て同化を口にするも、そは盲目的に何もかも米國人に同化せよと云ふのではない。そは只世界的社會に

同化するのである、米國人の有する世界的要素に同化せよと云ふのである。日本固有の文物にして世界的のものあらば(乍遺憾實は餘り無い)決して棄てゝはならぬ。日本人の持てる忠義心は實に偉大な精神である。之を棄てゝ決して拜金宗の擒となつてはならぬ。乍併此忠義心は舊藩時代領主に捧げた忠義心であつて、明治維新以來國家に捧ぐる忠義心となつた。そは非常な進歩である。今や二十世紀の文明は世界を一團として大社會たるの自覺に入つた、少くとも入りつゝある。從て我等が嘗て國に捧げし忠義心は直に之を移して以て人類社會に捧ぐる忠義心となさねばならぬ。そは國家が封建時代の藩よりも一層宏大なる團體であるやうに、人類社會は國家よりも遙に宏大なる、永久なる且つ權威ある團體なるが故だ。人生の目的は只自己の爲めに生くることではない。宇宙の總全と自我、全人類同胞と自分との相互的忠愛の關係を進歩的に醇美ならし

めることである。なせなれば、自我の向上發展は其社會生活に於ける愛の實行に於てのみ之を實現することが出來るからだ。

神と理想

今汽車が停車場を出發せんとしてゐる。車輪は動き始めた。列車は走り出した。列車は何故に走るのであらう？　そは機關車に繋がれてゐるからである。此途端、汗を拭きつゝ走り來る一人の男がある、彼は列車の後を追ふて走る。何故に彼は走るのであるか。前なる列車は機關車に繋がれてゐるが故に走るのであるが、此人はそれと反對で、繋がれてゐないが故に走つてゐる。人と機械との違ひは茲にあると、嘗てバアマア博士は云つた。誠に面白い譬である。若し人生が一定の外的原因に引づられて活動するのであつたならば、人間は此列車の如く一個の機械であつて、所謂運命の傀儡に外ならぬ。之に反して、人は內的の原因、假令へば汽車に乘りて或る目的地に到達しようと云ふやうな、自分

で創造した目的に驅られて列車の後を追ふてゐる。人生の理想、憧憬、希望、目的は潑剌たる人間活動の原動力であつて、人は其根原が何であらうと、過去がどうであらうと、そんな事に頓着する必要はない。唯未來に生くるのである、唯理想に生くるのである。

見よ、昔の人は哲學にも宗教にも人間の原由を尋ねずんば止まなかつた。佛教にては眞如より出でたるが故に眞如に歸るを人生の歸趣とし、クリスト教では神に似て造られたるものなるが故に神に歸る、即ち根原に歸ることを人生の目的とした。これ恰もグリシヤ人やヘブリユ人が黄金時代を過去に夢みて、過去に歸らんことを翹望したやうに、人が神より出でたりとて其由緒あるを誇るは、吾等が幼時自分の家系を自慢して、吾は何某の末裔なりと悦んでゐたのと同樣だ。幼稚な子供心には自己鞭韃督勵の手段ともなるのであるから、教育的

には家柄自慢も强ち排斥すべきではないが、今日科學啓け哲學進みし民本的な文明の世に、自主獨行の精神を高調しながら、事實として慥かむることも出來ない祖先や根原の自慢もつまらないではないか。吾等の祖先は何んであつても宜敷い、猿であつても馬であつてもかまはない、物質や物力の集合であつても差支ない。されど吾等の現在には止み難き人格完成の理想がある、社會改善の熱望がある。此理想、此熱望の存する所卽ち人生あり、いや少くとも、人生の價値ある所以で、人間の生涯から其過去に對する執着心を奪ひ去ることは出來ても、未來に於ける希望や憧憬を取り去ることは出來ない。もし是が出來たならば、其人は早や此世の者ではない。自殺者は凡て此理想や希望を失つた人達である。如何なる困難に逢ふても後へに撞若たらぬ人道の勇士が心靈の寂寞を感ずる時は、たゞそれ理想の姿が曇つた時である、希望の光りが薄らいだ時で

ある。

眞如に歸せよと宣べし佛教も、完全の神に歸れと訓へしクリスト教も、乃至は自然に歸れと叫びしルソオも、皆夫れ未來の理想を過去に投影して、恰も彼等の理想せる世界が過去の自然情態に存在せしかの如く、或は既に天の何れにか現存するものゝ如く思つたからで、人生をば家路に急ぐ旅人の如く感ぜし過去數千年間過だれし人生觀の致す處である。吾等は何處にも歸りはしない、唯進んで往くだけである。過去の完全に歸るのではない、又過去に完全がある筈はない。もしありとしたならば、宇宙には何等の進歩も向上もあり得ないに極つてゐる。されば吾等は日々向上の一路を辿り、各自の理想に向つて進んで往くのである。吾等は吾等が生活の經驗を土臺として創造した眞と善と美の極致なる最高理想を標的として、或は走り、或は躓き、又眞驀に突進する。これ吾等

の宗教生活である。されば人生屈竟の理想は吾等の神であつて、神は即ち理想であるといふことができよう。

處で、吾等の神は完成の神ではない、宇宙と共に進歩し給ふ神である。吾等の神なる理想は絶えず人間生活の發展と共に進歩する。今歴史上から道德の進歩と共に神の觀念の進歩せし事實を擧ぐれば、神が人生の經驗に內住して日に〳〵進歩し給ふことは明かだ。モオゼの信ぜし神ヤアヴエは軍の神、雷電の神であつた。彼れの十戒に、殺す勿れ、詐る勿れ等の訓戒があるが、是等の道德律は世界的のものではなく唯一部の民族にのみ適用される訓戒なりしことは、ペブリエ人が此戒言の遵奉者なりしに拘らず、エヂプト人を欺きて逃亡し、彼等を殺戮した事實によりても輙く判斷ずることができる。從てヤアヴエ神も其始めは世界の神ではなく、一個の民族神、或は單なる氏神に過ぎなかつた。エ

ヂプトから逃亡してきたこの民族が榮えて幾多の部落に分れ、一種の聯邦を形造り、各部落に判官(酋長)ありし時代には、ヤアヴエ神も同樣判官或は酋長の類と見做れてゐたが、ダヴヒデの時代に入りて國家の統一、帝國の設立と共に神も一個の帝王と見做されるに至り、下つてソロモンの死後南北二國に分裂するや、ヤアヴエは二國の神となりしが故に、玆に始めて世界神の思想胚胎し、既に二國の神たる以上は數國の神たるは何でもない話で、遂にヤアヴエは世界人類の神なりといふ思想に到達した。

以上は廣さに於ける神の觀念の發達であるが、深さにおいて今一例を擧ぐれば、ダヴヒデの時代、神はダヴヒデを敎唆して、罪を犯させ、而して後、之を罰し給へりと、紀元前六百年頃出來たサミエル後書第廿四の一—九に書いてあるが、同じ記事を反復してある紀元前三四百年頃出來た歷代志上卷第廿一の一—

八には、ダヴヒデを敎唆せしはヤアヴエ神自身ではなく、サタンであつたやうに書いてある。これ明かに此二三百年の間に宗敎思想の進步を示すもので、神の性格に對する觀念上、神が人を誘惑して罪に導き、後これを罰するが如きは不合理不道德なりと云ふ人間道德の發達と共に、神を辯護せんが爲に其罪をサタンに歸したのである。斯の如き例はいくらもあるが、先づ斯樣にして人間の道德心の發展と共に神の觀念も進步した。そは神は人間の道德の理想、標準であるからである。

人或は曰はん、神の觀念と神とは別物である。故に神の觀念に進步あることは勿論、吾等も異議なき所だが、神御自身に進步あることは出來ぬと。而も見よ、吾等は神御自身と吾等の經驗に上る神樣(觀念上の神は經驗の後件)とを區別することは出來ても、斯く區別されたる神御自身は吾等の生活と何の關係も

なき神である。之に反して吾等と密接の關係に立てる神は吾等が日々の經驗に上り、終ひは抽象的に觀念化され得る神である。而して此神は既に述べたやうに、吾等が知識的藝術的道義的經驗の發達と共に進化し給ふ神である。

されば吾等は神が進歩し給ふと云ふも、決して神の威嚴を損することはない。否却て、神は吾等の最高理想として時々刻々に進歩し給ふが故に、永久に我等が追望新求の目標として、吾等の日常生活と離るべからざるものとなり給ふのである。「天に在ます父の如く完かれ」とは今日の意味に於て「汝の理想の高きが如く高い、清きが如く清い美はしい人格を養成せよ」との意に外ならぬ。

げに吾等はイエスの人格の偉を仰いで、之に私淑し、之を模倣して、彼れの如く偉大に、彼れの如く高潔ならんことを願ふ。されどそは彼の昔に歸るのではなく、彼れの生涯の理想化されて、日々新らしくなりまさる彼れの人格に私

淑するのであつて、結局吾等が最も眞なり最も善なり最も美なりとする最高理想に憧れるのである。吾等は過去の歴史に現はれた偉人英雄の人格に鑑みて吾等が人生最高の理想を打建てた。されば吾等イエスの徒が彼に肉薄して、彼れの人格にあやからんとするも、究極の標的は理想の神に集中してゐるのである。神は卽ち眞善美の極致、人生最高の理想として、永遠に吾等が精神生活の根據であらねばならぬ。

實業家（ビジネスマン）の本領

一　何故に『町人』を輕蔑するや

徳川時代の社會組織は士農工商と云ふ順序で、武士官人を神の如く尊敬し、ビジネスマンを町人として輕蔑し、殆ど人間としての取扱ひを與へなかつた。人間として取扱はれぬ商人に人間の道徳、人間の責任を感ぜしめることは出來ぬ。從つて彼等は自ら不道徳の動物たるを以て甘んじ、世間も彼等の不徳を當然のことだとして非難の聲を擧げなかつた。少くとも大に讓歩して彼等を取扱ひ、武士に於けるが如き、高い道徳の標準を以て彼等の生活を批判しなかつたのである。

今日歐米の文化を容れ、社會の組織大變動を來せるにも拘らず、尙日本のビジネスマンの低道徳なるは、何故であらう。そは社會が彼等を輕蔑するからである。軍人や官吏には往々特別の刑法を作り、特別の職責を負はしめるが、通常人は平民として低標準の法律を以て之を律せんとし、殊に商人の如きは他の職業にある者よりも一層賤まれ、社會上低級のものとして取扱はれる。だから、彼等は自然、人間としての品格、責任の觀念を薄くし、不徳義な行動を敢てしても、恬として憚らぬやうになるのである。

見よ、猫の子が皿を舐めてもお母さんは叱らぬが、人の子が皿を舐むれば直に不行儀だと責むるではないか。何故に然るか。そは猫の子と人の子とに對する判斷の標準が違ふからである。人の子はお行儀して食事すべきも、猫の子には左樣な要求をしないからである。商人に對しても是と同じく、社會が彼等を

人の子として取扱はず、猫仔の如き無道德、或は低道德のものとして取扱ふから、ビジネスマンは益々人間としての自覺、品位、尊嚴を失ひ、不德義を恥とも思はぬやうになる。されば彼等の道德をして他の職業にある人々と同程度ならしめようとすれば、吾等は絶對に彼等を他の人々と同格同地位の者として、尊敬して取扱はねばならぬ。

二　凡ての職業を敬重せよ

私は曾て政府は一個の營業であつて、官吏はビジネスマンに過ぎないことを論じた。そは官吏や爲政者を賤んで然か云ふのではなく、普通のビジネスマン以上に尊敬すべからざることを意味したに外ならぬ。今私は積極的に商人其他のビジネスマンを公吏と同樣に敬重せよと云ふけれど、世間は聊か躊躇するで

あらう。そは彼等がビジネスマンの本領を誤解して「官吏は公益の爲にする營業に從事するも、商人は私利を目的として働けるものなるが故に、前者と後者とは同地位にあるを許さぬ」と云ふことに歸するであらう。そは一應尤もだ。又事實に於ても屢々左樣である。ビジネスは恰も詐欺と瞞着の巢窟の如き觀がある。併し仔細に觀察すれば、不道德なるは獨りビジネスマンのみではない。日本の堂々なる大臣閣下達が、年俸何千圓に過ぎぬ俸給で、公益を目的とするといふ政府の經營に從事して、僅か一年や二年の內に何萬と云ふ私產を作る者少くないのは何故であらう。誠に不思議ではないか。そは役德？　役德とは何んぞや。畢竟そは彼等が公益を目的とする政府に私利の爲に働いてゐるからではないか。時に警察の厄介になつて鐵窓の下に呻吟せる某々氏の如きは一代の不運兒で、惡事の發覺を巧妙に隱匿してゐる多くの公吏即ち彼等よりも一層僞善的

なる惡黨の犧牲となつた譯で、寧ろ氣の毒な次第だと云はねばならぬ。

若し是等の事實から論歩を進むるならば、政府だとて私利を目的とする營業（ビジネス）だと云ふべきではないか。乍併若し現在の事實如何に拘らず、政府は公益を目的とする營業なり制度（インスチチユション）なりとするならば、商業も工業も同樣、現在の事實如何に拘らず、吾等は公益を目的とする社會制度なりと云ふのである。若し然らずして、ビジネスは單に私利を貪る爲めの制度であるとしたならば、一刻も早く世に存する一切の職業（ビジネス）組織を破壞し去るべきである。凡ての社會制度は社會に貢獻するを目的とするが故に、若し非社會的の制度あらば、そは一日も存在の理由を持たないのである。

三　職業制度（ビジネスインスチチユション）は私利の爲にあらず

私は更めて云ふ、ビジネスは決して私利を目的とする社會制度ではないと。そのこれを私利の爲に惡用するはビジネス本來の意義を沒却したものである。人間の生物的要求として日々の衣食住を得んが爲に生產業の必要が起り、生產の運轉分配を節度し、或は敏活ならしめんが爲に商業制度が起た。ビジネスマンは財貨便達の公共事業に從事してゐるのであるから、其目的、其抱負、其責任は全然政府の役人と同一である。ビジネスは日常生活の必要から起つたもので、有無相通じ、缺餘相補足し、需求相交換する公共の機關であるから、之に從事する人士は其職務の神聖なるを覺り、私利を挾んで之を冒瀆するやうなことがあつてはならぬ。其取扱ふ商品は決して彼れの物ではない、社會の財產である。彼は單に預つてゐるだけである。從て預つた物のやうに大切に取扱はねばならぬ。預り物であるから其眞價を匿す必要はない、其外面を飾る必要はな

い、正直にその實價を要求して購買者に品物を渡さねばならぬ。詐欺、瞞着、誇張、強請の必要は全然ないのである。

されば商人は仕入値で品物を賣らねばならぬか。もし然らばビジネスに從事するやうな馬鹿者は一人もないであらう。誤解する勿れ。仕入値と賣値とは勿論違ふ。其差違は卽ち品物便達の勞銀である。ビジネスマンはビジネスなる社會制度の役人として相當の勞働を提供してゐるから、彼れ自身の生活費として勞銀を受取るは正當である。其勞銀は卽ち賣買代價の差額より引去るを以て一の便法とするのである。而も此場合に於ける勞働は單に肉體の勞力のみではなく、需用供給の調和を計るべき敏活なる技術を要するが故に、彼れは未熟練(アンスキルド)な勞働者ではなく、一種の技師であるから夫れ相當の報償を收めねばならぬ。又ビジネスマンは單に勞働を提供するのみならず、幾多の資本を下して財貨を運

轉してゐる。此資本を銀行に預けたならば相當の利子を收めうるが故に、資本に對する利子を取ることも正當である。銀行に預けた金は安全に歸り來る見込あるも、企業の資本は不測の障害に遇ふて損失の危險があるから、其利子と其に保險料を收むるも正當である。

四　ビジネス生涯の光榮

斯の如く資本と勞働に對する相當の報酬を受くるは、官吏が月俸を受くると同樣、商人の權利である、又社會の義務である。されば商人は入手せる收益から資本と勞働に對する適當の報酬を差引き餘剩ありと知らば、そは官吏が官金に對すると同じく社會の財產であるから、之を以て決して私服を肥やすやうなことはできぬ。然らば如何にして之を社會に返却すべきやと云ふに、或は品物

の賣値を下げ、或は其事業に對して社會が擴張を要求せりと知らば之を資本に轉嫁するを得べく、又は社會改革事業に醵金して公共の便益を計ることなど、幾多の方法があるであらうが、要するに、自我的の欲望を滿足せんが爲に、それを浪費してはならぬ。

されば商人は其事業に對して常に社會の要求に仕ふる公僕たるの觀念を保持すべきこと、恰も政府の役人が其國民の公僕たる觀念に立つべきと同樣で、一點の私心を挾むことなく、忠實に正直に事務の通達を計らねばならぬ。其俸給を定むるにも、政府の役人は政府が定めてくれるから私慾の潛入する恐れが少ないけれど、ビジネスマンは自己の俸給を自から決定せねばならぬから、公平なる判斷を得るは甚だ困難である。會社の腰辨見たやうに、他から定額の月俸を貰ふて働いてゐる方が餘程呑氣である。併し其困難があるから、ビジネスマ

ンは却て豐富なる人格品性鍛練の機會を有する譯で、誠實に卒直に公共の利益を主眼として此業に從事する人は、官吏以上、軍人以上に光榮ある生涯を送るは勿論である。傳道師、教師、其他精神的の事業に從事する人の生涯は一面羨むべきやうであるが、必しも然らず。此ビジネスてふ動もすれば、否な、現に罪惡の氾濫する泥海の渦中に投じて、蓮花の如き清き美はしき生涯を送るならば、吾等は寧ろ常に神の名を稱ふる牧師や、眞理の友を以て自任する學者や教師以上遙に斯るビジネスマンを尊敬するのである。

社會階級の相異、貧富の懸隔益々甚しきを加ふは抑も誰人の罪であらう。貧と不潔より來る多くの社會罪惡は由來何人の責任であらうか。從來のビジネスマンは職業其者に於て、詐欺、虚飾、瞞着、投機など既に充分の罪惡を犯し、更に社會の多數者を貧と不潔と罪の苦痛に陷れて、二重にも三重にも罪を犯し

てゐたのである。覺醒せよ、ビジネスマン！　諸君はビジネスなる社會制度の公吏なるを知らずや。諸君が職責を重んずると否とは、社會の幸福と進運に如何ほど多大なる關係を有するものなるかを知らずや。敢えて諸君と云はず、何れの職業に從事する者も、よし豪奢贅澤の生活をしなくとも、世界十六億の生靈を押しなべて、平均生活程度以上の生活をなし、均等以上に財貨を消費するは經濟上、道德上の罪惡である、違法である。自覺せよ、ビジネスマン、願くば諸君が社會に對する職分を自覺して、舊來の陋習を一掃し、『私利を目的とす』といふ根本的に誤れるビジネスの觀念を放擲し、公共の利益を主としてビジネスに從事し、自己の人格を敬重して人生の光明を觀るに至らんことを。

無我と大我

佛敎などで無我とか無我愛とか云つて、自我滅却の生活を讃美せるは、旺盛なる青年の客氣　任せて奔放する意馬心猿を制御せんが爲めには、聊か得たものであるかも知れぬ。が、進步主義積極主義、殊に個性の權威を高調せる今日の民主主義、人本主義とは到底相容れぬものである。試に問ふ、吾等個我を棄て去つて、萬法一如の眞理に歸り、そこに果して汎神的の悅樂を味ひ得るであらうか。五欲は罪惡の源泉なり、而して自我の執念は五欲の源泉なりと云ひて、罪を未發に防がんが爲め、先づ自我を虛無と感ずる。なるほど之によりて自我の造り出す罪惡は無之を得よう。乍併罪惡の主體たる自我を滅却せば、所詮善行の主體たる自我もあり得ない譯である。吾等若し善惡二道の埒外に超然

たるを得たならば、そこに無限の平和を味ふことが出來るかも知れぬ。而もそは枯木冷灰、死の如き平和であつて、生の溫味を感ずる平和でないことは勿論である。よしそが寂滅爲樂、枯死の平和ならずとするも、そは禽獸蟲魚の夫れ以上の平和ではあり得まい。眞の平和は無爲の平和ではない、活動の平和だ。人各々其處を得て、活躍する奮鬪の平和である。眞と僞と、善と惡と、美と醜との絶間なき戰に於て、眞善美の勝利を博する喜びが眞の平和である。

されば善惡の因つて起る所の自我は何時までも滅却することは出來ない。それは自我なければ、善も惡もないからである。よし客觀的に善惡二道あるも若し自我なければ、善惡の行爲に對する責任を個人に見出すことは出來ないからである。吾等もし善惡の源泉を少くとも其一半は個人の自由意志に起因するものだと見る倫理觀の上に立ち、且つ吾等の日常生活の經驗において、事實上然か

信じ得るならば、個我は行爲の主體として、何處までも其存在を否定することは出來ぬ。否却つて惡を去り、善に就かんとする吾等が生命中心の要求は一層自我の意識を强め、人間が道德的になればなるほど、沒我の境地から遠ざかつて往くのである。自我の意識を沒却するは精神的自殺(スピリチュアルスイサイド)ではないか。吾等は自我の根據を失つて、どうして生活を續くることが出來よう。吾等は徒に思辨を弄して、自我の本體を虛無と感じ、或は汎神的大宇宙の一變幻と見る必要はない。吾等の根源は何んであつても宜敷い、物質であつても、物力であつても差支はない。今更お里自慢で、神から出たの、宇宙の大靈から流出したものだなど威張つて見てもつまらない。但し吾等が人間生活の經驗によつて、贏ち得たる自我は當面己が行爲の責任者として、宇宙に對して立つの自覺と勇氣を持つてゐることは事實だ。

佛教の所謂無我の愛は一面詩的な表現で、哲理的に嚴正な批判を受くべき言辭ではない。何となれば愛は愛する者と愛せられる者と二個の對象を要する。若し愛する自我が虚無なれば、愛其者も虚無だ、幻影だ。尤も個我の實在を經驗する吾等も愛は靈と靈との融合であると云ふ。そは自他の區別を超越した融合である。『汝は我なり我は汝なり』といふ神祕的な心靈結合の氣分である。乍併尙ほ此結合に於て自他の區別を全然沒却するものではない、唯超越するのである。愛は即ち小我を超越して大我に歸するのであるが、小我を沒却して大我に入るのではない。從つて無我と大我とは同一義であることは出來ぬ。個我を押し擴げて他の個我を攝取抱容し、之を家族より國家に及ぼし、全人類社會を抱擁し盡して、終には宇宙の森羅萬象に及び、時間的にも過去、現在、未來を通じて、全宇宙の利害休戚榮枯盛衰の運命に及ぶ。斯の如き人は決して自我を

棄てゝ他を愛するのではなく、自我と共に他を愛するのである。彼はプロテスタント教の信條に云へるが如く『人は神の榮光を顯はさんが爲に此世に來れり』と稱して、徒に神の奴隷となり、傀儡たるを甘んずるものではない。彼は常に一個の人格として神と共に働き、神と俱に樂しまんことを願ふのである。されば彼れの愛は他の個我を自我に攝取する行爲であつて、そは自我の擴大、即ち一層大我の域に達することを意味するに外ならぬ。勿論、始から小我を棄てたのではないから、大我の自覺に到達するも、尙小我は常に其内に含まれ、區別の内に平等を見出し、平等の内に常に區別を失はぬのである。吾等若し個我の自覺を滅却し得ば、或は全世界と融合することが出來るかも知れぬ。而も斯くして得たる全宇宙と我が生命と果して何等の交渉ありや。吾等は自我の存在を否定するほど耄碌してはならぬ。

吾等の自我は小我の爲めの自我ではなく大我にまで生長すべき條件的の自我である。我等の人格は無人島に蟄居して發展するものでない。必らずや社會生活にそが成長の糧を仰がねばならぬ。吾等の目的とする處は個々人格の創成である。"The end of man is man." 人生の目的は人生その者であると。個々格人の創成は個々の人々が己を活動の燒點として、そを無限の宇宙に展開し、擴充し、宇宙の萬法一切を自我の内に抱擁し、攝取し、融和し、統一して、宇宙大の生活を營む。これ人生の極致だ。勿論、其内には矛盾もあらう、撞着もあらう。從つて煩悶奮鬪の絶ゆる暇はないであらう。運命と自由、遺傳と創造、保守と革命、理性と感情、義理と人情、僞と眞と、惡と善と、醜と美と、即ち小我と大我との對抗爭鬪絶る間はないであらう。吾等は屢々『父よ願くば此杯を取り去り給へ、されど我が意を成なんが爲にあらず、御意の儘に』と云ふ如き、

生の奥底から湧き上る嘆聲に熱血を絞るであらう。然も此の煩悶懊惱を通して吾等は動物的官能的孤我の生活を脱し、人間的、社會的、區別的の自意識に進み、遂に神的、宇宙的、抱擁的、普遍的、統一的の精神生活にいそしみ、層一層、靈的向上の道程を辿る、これ人生の光榮であつて且つ其意味深き所以だ。

されば吾等の生活は古への神祕論者(ミスチック)が爲せし如く、新生の自我を滅却して、既存の大我(神)に歸し、夢幻恍惚の裡に本地の風光を讃する醉心地ではない。そは自我の内に未成の大我を活現して、複雜の内に統一を立て、矛盾の内に調和を求めて、一層深刻に、一層切實に、一層透徹に生の醐醍味を味はんとする。そは飽くまで活動の生涯、奮鬪の生活であつて、絶間なき生の充實、絶間なき生の創造の内に宇宙の神祕と人生の祕義を索ぐる。否な、そこに宇宙の神祕を建設し、人生の祕義を創造する。これ人生の偉大にして且つ其價値ある所以だ。

奇蹟的信仰と賭博的蓄産

一　奇蹟的信仰は過去の惡遺産

奇蹟的信仰とは何ぞや。そは他力信心の別名であつて、人は自分の努力奮闘によつては迚も自分の靈的生命を開拓し往くことは出來ぬから、外來の力によりて俄に救に預るとか、俄に靈的完成の域に達するとか云ふのである。單にそは自分獨りが特別に左樣な弱虫であると云ふのではなく、人類全體が一般に左樣であると。彼等は舊式のクリスト敎が稱へたりし如く、始祖アダムの罪障を遺傳せる爲め、自分で自我的に罪を犯した場合に救が必要であるのみならず、本來人間の持ち傳へた原罪（一種の性惡說）から免かれるには、其起因が自分自

身でないように、自分で此生れ付た惡性原罪をどうすることも出來ぬ、只外來の力、即ち神の恩寵に依賴する外仕方がないと云ふのである。斯て彼等は此原罪より救出す救主をクリストに見出した。併しクリストを斯の如き救主と見るはアダムの原罪說を根據としてゐるのであるから、もしアダムなど云ふ人間の始祖は歷史上證明することは出來ぬ、否却て人間は生物進化論的に下等動物から順次進化し來つたものだとするならば、アダムなる始祖あるべき筈なく、從つて此人より遺傳せる原罪のあるべき筈はなく、又此原罪を擔ふて十字架上に昇りしといふ、クリストに關するパウロの信仰は所詮荒唐無稽の迷信に外ならぬ。

又或者は曰く、よしアダムの原罪說はパウロの錯覺であつて、根據なきものとするも、此世が罪障に充ち滿ちた惡魔の世なることは明かである。內村さん

は何時もさう云つてゐる。此世はアダムによらざるも現に墮落の淵に沈んでゐる。吾等自身が現にさうである。そして此墮落の淵より免れ出てゝ、一個の堂々たる道義的人格となるには自分の努力では駄目である。人間業では駄目である。惡魔の力に抗するものは只クリストの力のみである、神の救助船ばかりである。吾等は難破せる憐れな罪人ではないか。只外來の力を藉りてのみ眞人間の地位に復歸することが出來ると。斯て從來他力信心が佛敎でもクリスト敎でも其大部分を占めてゐたのである。乍併此考へ方も今日の科學的信仰とは到底一致し難いものである。見よ、今日の人間社會は左樣悲觀的に全然墮落の淵にはまつてはゐない。人間は左樣に難破した罪人ばかりではない。人は道義的にも進化論上より見れば段々進歩向上しつゝあるもので、罪とは動物的生活から人間的精神生活に向上しつゝある人間が從來の惰力に驅られ、或は自身の不心

得から素との動物的自我中心の生活に歸らんとする心的態度の顯現に外ならぬとするならば、罪の原頭は外になく、內にある。最早や罪の存在を以て惡魔なる外來の力に歸する必要はない。從つて惡魔の存在を疑ひ、且つ之を否定すとせば、之に打勝つてふクリストの救も亦意義なきものとなるではないか。

二　他力信心は富籤の一種

然らば、阿彌陀如來やクリストを以て救濟の神とする奇蹟的信仰の根據は何れにありや。現に人類の大部分は此信仰を屈竟のものとして只管他力信心に廻仰し、天國への旅行券を買込むに汲々たる有樣ではないか。私は此奇蹟的信仰かば一種の富籤と見る。それは凡てが當るわけではなく、人間の努力如何に拘らず、只或る者即ち神の思召に叶ふ者のみが救ひに預ると云ふからだ。又長老

派の信條に從へば、運命觀的に救濟の約束が先天的に豫定されてゐる者のみが救はれると云ふのだから、人間の努力は所詮無益である。只誰れが救はれるやうに極まつてゐるか、人間の眼には分らないから、皆々信仰の道を辿らねばならぬと云ふやうなものであるならば、宗教的救濟は一種の富籤と考ふるの外はないのである。皆それ信仰の生涯に入ることは出來るが、救拯の特典に預るものは卽ち擇ばれたる少數であると云ふ、これが一種の賭博でなくして何であらう？　もし『豫定』の運命を否定するも、突然外來の力によりて、此世的生涯から彼世的生活に入るとか、或は自分で脫罪積善の努力なくして、神の力により罪の生涯を解脫して俄に善人となるとか云ふ如き奇蹟的信仰は所詮賭博的の信仰である。

三　道義的懶惰と一攫萬金の夢

今一層心理的に、かくの如き信仰が何故に此世に存在し居るかを考へて見るならば、斯る信仰の價値を明かにして、宗教生活を營まんとする人々のよき警戒となるべしと思ふ。元來人間は屢々懶惰に流れ怡樂を好み、最少の勞力を以て最大の結果を得んとする經濟的欲望に滿ち充ちてゐる。どうかして一攫萬金の富を得たい、そして呑氣な安樂な生涯を送りたい。かくて色々な企業は企てられ、冒險は行はれ、『少資本成功法』など云ふ「實業之日本」的の記事は到る處に歡迎され、甚しきに至つては座して一攫萬金を夢み、投機に手を出し賭博に耽る。賭博に經驗ある人の實談を聞くに、彼等は快樂の爲めに決して花を引くのではない、乘るかそるかの金儲が第一の目的であると。粒々辛苦一錢二錢と

切り積つて貯ふる金の間鈍ひこと、それよりも一層、富籤でも買つて、當れば一躍田舍大盡、一夜の豪遊に人生の至樂を盡すことができるなんか思ふは、何れの懶け者にも免かれ難き空想であらう。

古來精神界の事柄にも同樣の道義的懶惰性が人間生活に附纏ふてゐた。日々の粒々辛苦で惡を去り善に就き、罪を脫して愛に來るが如きは、誠にまのろいやり方だ。吾等が如何に努力しても一萬二萬の金は容易に得られるものではない。そは畢竟運である。もし運がよければ一夜の內にでもミリヨネヤ（百萬長者）になれる。緣の端に繫がつてゐる富豪の遺產分配にでも預かれば棚から牡丹餅だ。精神的に人格の向上をはかるにも、神の寄與的恩惠によつて、外來の力に救はれた方が便利である。何をくよ〳〵川端柳、一日一惡を去り一善を迎へるやうな頓馬なことがどうしてできよう。それよりも洗禮とか聖靈の降下と

か云ふようなレヴァイヴァル運動によつて、一足飛びに非人間から眞人間の仲間に這入り、或は慈愛深き神の救ひに預かる。これ最少の勞力を以て最大の効果を得る靈界の經濟である。從來のクリスト敎で之をレデムプチイヴ　エコノミイ(Redemptive Economy)と云ひ來つたのも無理ならぬ話である。

乍併惡錢身に着かずとやら、賭博や投機で儲けた金は難有味が少いから、酒色の巷に蕩盡してしまうことが多い。それと同じように、日々の努力、粒々辛苦の下に罪を去り愛に就き、一層愛の淸淨と增大を計る爲めに奮鬪しつゝある者は、此精神生活それ自身が何物にも換へ難い寶玉であつて、如何なる誘惑に逢ふても容易に動かされず、靈肉益々堅固に信仰の道にいそしむのであるが、奇蹟的手段によりて偶然信仰を得た者や、常に外來の力に絕つてのみ救れの道義的生活を營まんとする者は、境遇の如何に左右され易く、偶然的に奇蹟的に

過去の情態に逆戻り、吐き出した物を再び貪り食ふのである。

四　奮闘的蓄産と奮闘的信仰

一日一錢二錢と切り積つて貯へる儉約家は、博徒や山師の眼には野呂間としか見えないのである。これと同樣、精進努力して歩々人格の向上をはかり、宇宙人生の妙諦に參せんと日夜奮闘してゐる修道の士は、ビリイ　サンデイ式の眼を以て見れば、憐れな理窟屋としか見えないであらう。されど思へ何れが最後の勝利者なるかを。現代殖産工業組織の進歩と共に、一攫萬金の投機的企業は益々不信用を受けるやうになつてきた。『怠らず往かば千里の外を見ん、牛の歩みのよし遲くとも』と德川家康は歌つた。正直と勤勉と、そして不撓不屈の精神とを以て、日々僅かの貯へをなして遂に巨萬の富を造る事業が如何に尊ばれ

てゐるかを見たならば、富籤的信仰に依賴して一回の洗禮や悔改や聖靈降下の經驗の如きものにより『我は救はれたり』など思へる者の如何に憐むべきことであるよ！　私は是等の人々が使ふ宗教的の言葉と只外界の表樣のみクリスチヤンらしくなりて、其實際生活はやはり素の儘と餘り差等なき者多きを見て、衷心忸怩たらざるを得ないのである。

由來、變態心理に支配されてゐる極く少數の人々の外、一時の發奮により、殊に外來の刺激により突然表裡轉倒する如く見變つた人となることは殆ど不可能である。人間の最大多數は教育的に漸進的に歩々向上の道を辿り、朝夕彼に接してゐる者は何時如何にして彼がそんな靈的成長を遂げたか分らぬ位に徐々として進み往く。併し一年も二年も見ない内に子供の生長してゐるのが驚かれるやうに、吾等は一二年も逢はなかつた友達に驚かれるほど靈的に生長し

たいものである。斯る進化的信仰の生涯を辿れる者は、例ひ自から佛教徒と名のらず、クリスチャンと呼ばず、又必ずしも教會に出入せず、アーメン〳〵を口にせず、稱名を稱へざるも、農園に、工場に、商舗に、事務所に、到る所に社會の米の飯として、『隠れた酵母』の如く、彼が靈的感化の力を發揮し、清き愛の實生活を以て彼に接する朋輩知己の靈的生命に偉大なる影響を與へつゝあるのである。

私は從來一般の宗教家が全力を注いで高調し來りたる變態的投機的外來的信仰に逆つて、斯の如きじみな平凡な、而も强固な實質的な、誰れにでも出來る漸進的實行的自主獨立的努力奮闘的信仰の生活を極力歎美するのである。

祖國の惱み

一　日本は何故に貧乏なりや

人口の過多、海外移住の困難、財界の不振、物價の騰貴、生活難の呼聲、これ最近十年日本の社會を惱ましてゐる痼疾である。國民は之を天災地變の如く考へ、人力では挽回し難きものゝやうに心得て、只それ天地に慟哭するのであるが、是等の現象は畢竟人爲的で、國民自らの失策に出でたるものではないか。人口の過多は道德的結婚と子女教養の責任の感により精神的に之を拘制し得べく、海外移住の困難は國民自身が世界的良民たるの資格を涵養することにより て解決さるべく、財界の不振や生活の困難は、これ皆、近時流行の貧乏國に似

合はぬ奢侈の風や、勞働時間の規律なきこと、從て事務や勞働の好果を收め難きことや、懶惰の習慣、租稅の誅求、軍人なる不生產的階級の跋扈に基因するもので、折々起る地方の饑饉などは純然たる天災ではなく、國民の財力に餘裕なきより起る、少くとも半ば以上は人爲的な災禍で、只管に天を恨み地を憎む譯には往かぬ。

吾等は常に思ふ、米國は豐かな國で、僅かの勞働で多くの給料が取れる。日本では如何に働いても、元來國が貧弱なのだから相當の報酬を得ることは出來ぬと。而もそは一面觀で、日本の勞働者と米國のそれと何れが能く忠實に働くかを比較すれば、自から其報酬に差異ある所以が分る。勿論、在米の日本人は米國流に一日何時間と云ふ組織的な勞働をやるが、日本ではなださうでない。假りに大工を傭ふとして、日本では米國に於けるが如く、晝前四時間、晝後四

時間立ちづめに機械のやうにせつ〳〵と働くのではない。煙草上りやお茶上りや、三食の間に費す時間や、又仕事を爲るにしても餘り機敏でないことなどを考ふれば、彼等の給料の安價なるは當然である。米國では必ず日曜に休むから他の日には決して休まぬと云ふ精神を以て働くが、日本ではまだ日曜を嚴守しないから、づる〳〵べつたりに休みたい時は何時でも休む、休んだとて皆と一所に日曜に休むのとは違ふから、自由勝手な休み日は當人に取りて餘り樂しい休養ではない。又日本人は働く時には滅茶苦茶に過激な勞働をやり、或は餘り長時間働いたりするから、其反動として却て日曜だけしか休まぬ人よりも疲勞し易く、好い勞働の結果を收むることが出來ぬのである。

以上は單に一例であるが、斯の如き勞働方法や、其他一般の生產組織の不完全よりして其密度ベルジウムやホランドの半分にしか當らぬ人口を支ふること

が出來ないで『民衆皆菜色あり』と嘆いてゐるが、そは決して天災地變や國土狹小など云ふ如き自然の事實に責任を負はしむることは出來ぬ。そは國民自からの懶惰の結果である、奢侈の結果である、即ち彼等自からの罪である。

二　奢侈と懶惰——道義の頽廢

然り、日本近來の惡傾向は奢侈の風である。中流の婦人の用ゆる衣類化粧道具の高價なること、米國の富める貴婦人社會以上である。彼等は實用の爲に着ず虛榮の爲に衣物を着る。甚しきに至りては虛榮處ではない、無意味に着ない衣物を澤山持つてゐる。只一年に一回とか、或は婚禮の時に一度着たとか云ふやうなものを、只虫干する爲めに大事に保存してゐる。着ないほど不必要な着物なら全然作らないが增しではないか。米國婦人が如何に贅澤な風をしても一

週間に一度位着ないやうな着物を仕舞つて置くことはない。勿論流行を追ふて彼等は幾何でも着物を作る。併し多くは既に持てゐるものゝ仕立直しである。而して米國婦人の着物は頗る安價で出來る、日本の三越や白木屋で出來るものとはまるで値段が違ふ。お隣りの誰れさんは衣裳持ちだと日本の若い女が羨まれてゐるのは、恰も彼女は守錢奴だと卑まれてゐるよりも實は一層恥づべきことだ。守錢奴の金は使はれる機會があるが、衣裳持ちの着物は虫に喰はす外何の用もない不經濟極まる馬鹿氣たことである。

食物に於ても同樣、日本人は健康の爲に食はずして美味の爲に食ふ。毎日麥飯粟飯に菜葉汁など吸つてる百姓の人が偶に町へ出てたり、夜遊びに出たり、或は祭りの日などに美味を暴食する。又町に住む人は三食の外にお汁粉のお萩のと間食が盛んである。客を招ひても、厭やと云ふお客に御馳走を强ひ、酒を

浴せかけて以て饗應の方法を得たものだと心得てゐる。何故日本人が斯ような時偶の暴食や時ならぬ間食を貪るかと云へば、そは畢竟三度の食事が餘りに粗食で且單調だからである。結局彼等の食料は餘り經濟向でない。試に日々生活の粗食と、間食や奢食の費用一切を合せて一日に割充てると、實は高い食料に當つてゐる。若し彼等が間食や酒興を廢し、其費用を以て日々三度の食膳を改良したならば、どれだけ好い生活が出來るか知れない。平素粗食する者は營養不良の爲め身體疲勞し易く、過激な勞働の後には其反動として色々な欲望が起る。夜遊に往きたくなる、料理屋に跳ね上る、五圓十圓は眼だゝく暇に費ひ果して、而も健康の爲に何も得た處はない。否な却て健康を害ふて田舍に逃げ歸る。彼れ若し粗食して月々四五圓の食料を使ふとせば、之に臨時費を省いて二三圓を加へたならば、町行の欲望の大部分は起らずして濟むであらう。之を要

するに平素粗食する國民は三食の外に間食を恣にし、時に暴飲暴食する國民である。暴食暴飲は食物の奢侈を促がし、食物の奢侈は衣服の贅澤に伴ふ。

散財、傲遊、酒色、斯の如きものを要求する國民に、娼婦や、藝妓や、地賣や、賭博は止むを得ぬ附き物である。而して贅澤や、虚榮や、傲遊や、投機欲の盛なる處、普通の月給や給料では資金が足らぬは尤もで、公金費消や、詐欺や賄賂が公行する。何々少將、何々大佐と云ふ所謂國家の干城たるべき人々が人民の膏血を絞り集めて、國防の費用とした製艦費などを不正の手段で着服することもある。其金を何に使ふ？　妻子を養ふ爲めだとすれば尚恕ずべき點がないでもなからうが、傲遊贅澤の糞堀に投込むのだとは言語道斷。而もそは少將や中將の地位のみでなく、上は大臣宰相より下は水兵上りの御用商人に至るまで、收賄や贈賄の力に依つて國家の大權を濫用し、政府を喰物にすることも頗

る多い。腐敗墮落は軍人部内に限らない、何れの官吏、何れの公吏の間にも盛んに百鬼夜行の醜態が演ぜられる。鐵窓の裡に呻吟する知事あり、局長あり。況や一宗の法主として萬衆の崇敬至らざるなき、然り、彼の使つた風呂の水までも勿體なしとて隨喜の涙で口腹に啜り込む者さへあるほど、生き佛樣として取扱はれてゐる所謂、貌下の身として信徒から捲き上げた『淨財』で藝者買をする、醜業婦を受出す。又或者は本山の財産で投機を遣ると云ふが如きに至りては、全く狂氣の沙汰としか思へぬ。而も此嘘のやうな事實を屢々耳にして、吾等はどうして亡國の聲を發せずに居られよう？

對岸の米國では吾等日本人は人種的に所有權や、市民權や、結婚の自由までも褫奪されて誠に遺憾に堪へぬ。歐洲の移民と同等の取扱ひを受けぬのは誠に殘念至極である。吾等は之れを人種的の偏見に歸し、彼等の見解を正さんと務

めつゝあるが、豈に圖らんや、皮膚の色が劣等の人種と見られるばかりでなく、今や道德的精神的にまで劣惡の人種として輕蔑されるとも、どうも致し方ない情態が段々に知れ亘つて來る。隣國の支那人から輕蔑されるばかりでなく、南米や南洋にても屢々排斥の聲を聞く、これ畢竟日本人の道德心が低いからだ。

なるほど、酒色より起る諸多の罪惡は何處の文明國にもある。併し國家の上流に立つ人、宗教や教育の中樞を司る人に、日本のそれの如き腐敗を見ることは決してない。罪の惡方面を見れば極惡非道の者少からぬやうだが、歐米の中流以上の社會に在る人々は多くは健全の思想を持ち、正直な眞率な生活を送つてゐる。然るに吾日本に至りては上流社會、學問ある者、才智ある者、權威ある者ほど却て腐敗墮落の底に沈んでゐるのは何故だらう？　私は敢て慷慨悲憤

を事とする者ではない。此墮落腐敗の原頭を討ねて、健全なる讀者諸君と共に救濟廓清の方法を講じたいのである。

三　頽廢の由來

昔の武士道は金錢や酒色に冷淡なれと敎へた。武士の時代は過ぎ去つて法制經濟の世となり、武士(軍人)が守錢奴となり、僧正や法主が酒色に迷ふ、而して『新らしい女』は五色の酒を呑み、『同棲』と稱して家庭を紊亂してゐる。それは社會秩序の變轉の然らしむる處であるか、それとも社會秩序の轉換と共に何か新らしい人生義を見出すことを忘れてゐたからではあるまいか。新らしい世には新らしい理想や、新らしい道義の標準や、新らしい宗敎が必要である。しかも日本は明治維新と共に社會秩序を變更せしも、其道德の標準、其理想の標

的、其宗敎の內容は少しも變つてゐない。新らしい西洋の文明、然り單に物質的文明を輸入し咀嚼したばかりで、精神的の文明は之を度外し、排斥してしまつた。若しそれ西洋諸國に於ても今日日本人が尊重するほど物質文明のみを尊重したならば、彼等の社會も腐敗するに極まつてゐる。

物質文明は西洋の產物なるも、彼等の社會の堅實なる所以は物質文明の背後に精神的道德的の根柢があるからである。彼等の社會は物質文明の進步と共に精神的方面も同時に進步してゐるから、日本のやうな危險には陷らない。自然主義が起り、肉欲主義が興つても、何時の間にか暗々裡に葬られてしまう。日本では反對で唯物主義や自然主義、拜金主義や獸欲主義の風が吹荒むと、國民は萍の如く之に從つて漂々浪々、そは誠に健全な社會思想の根蔕がないからである。そは經濟組織や社會組織の變更と共に國民の理想、道德、宗敎が進步改

善してゐないからである。

古い〳〵忠君愛國の理想を振廻はしてゐる彼等は果して忠君愛國であるかと云へば、決してさうでなく、却て國を賊し民を虐げ、名聞利達の巷に迷ふ乞食である。彌陀の美名を口にして他力信心の欣求に耽り、或は一念三千三諦圓融の觀を凝らすといふ三昧の徒が、肉蒲團に八幡地獄の怪聞を馳せ、破廉恥の罪に醜態百出して恬として顧みない。彼等は實に忠君も愛國も彌陀も佛敎も信じないのである。そは新らしい社會に古き理想、古き人生の解釋が既に意味を失つてゐることを示すものではないか。彼等の墮落腐敗の根本は人間と人間との社會關係以上に、人間と宇宙との社會的關係、人格的關係の存在を認め、其關係を進歩的に調整することを以て最後の目的としないからである。彼等徒に人と家、個人と國家、個人と社會の關係を口にするも、其關係の起る原頭である

宇宙全體と自分との直接內的の關係を正しうすることが出來ぬ間は、人間と人間との社會關係は堅實强固な地盤に立つことは出來ぬ。單に忠君愛國を口にするもそはお題目に過ぎぬ。單に彌陀の本願に縋ると云ふも、そは言葉の綾に過ぎぬ。眞實之を信せずして、如何で理想に對する熱情湧き、如何でそを實行する力となることが出來よう?

四　先づ人生の根本問題に觸れよ

宗敎は力である、實行の力である。善を思ふて善を行ひ、美を慕ふて美を行ふ。宗敎は實行の力である。而も此實行の力は外來のものではない。古人の思ひし如く、宇宙の外に超然たる神が折々此世に降り來つて、外來の賜として吾等に與へ給ふやうなものではない。そは各自の心靈の奥底から起る自覺であ

る、創造である。此自覺、即ち自我と宇宙との社會關係の自覺なき人に、善美にいそしむ力の起る筈はないのである。

外的に見た夫婦關係、家族關係、個人と職業界、個人と國家、個人と世界萬國、其他人間一般の社會關係に於ては、吾等は直接に危急存亡に關すると云ふほど眞面目な態度を以て思考し行動しない。外界に現はれた社會關係に對しては外面的態度で之に接せんとする。內心は如何でも宜敷い、只外面さへ立派に調和されて居ればそれで社會は成立つものと思ふ。處で外面には貞操の男子として妻に見せかけてゐながら、實は惡所に出入して知らぬ顏の半兵衛を極め込み、啻に妻を欺いてゐるのみならず、先づ自分を欺いてゐる。これでも外形には妻と自分との間に夫婦關係が成立つてゐると思ふ。社會の外面には報酬とか手數料とか云ふ名目で立派に表部を飾つてゐても、實は賄賂を出さなければ

貴樣の品物は買つてくれぬと、强迫的に收賄する者多く、これも社會を欺くのみでなく、先づ自分を欺いてゐる。

これに反して凡ての社會關係を內的にするには如何なる態度が必要であらうか。外面には妻の嫉妬を買ふても男子の貞操を守つて心疚しからぬ人は、外的に社會關係を蹂躙してゐるやうだが、內的にはちやんと妻に對する社會關係を知り、愛の律を遵奉してゐる。乍併單に妻と吾、國と吾、人類と吾とゝふが如き關係を考ふるだけでは、この內的の社會關係も實行の力を贏ち得ることは出來ぬ。そは自己の心靈の奧底を打叩いて先づ吾は何者なりや、吾は今呼吸せるも何れの時か休止すべくある。生とは何ぞや、死とは何ぞや。吾は何れより來り何れへ往くのであらうか。過去と未來、原因と運命とは何なりや。我は何の爲に此世に在りや。此世の生涯何の價値ありや。人生の本領は何者なりや。尙一歩

を進めて、吾と吾以外の物象、生體、否な是等凡てを抱容する宇宙全體との關係は何なるべきや。吾等は此宇宙に對して如何に行動し、或は如何に宇宙を取扱ふべきや。若し妻や子を如何に取扱ふべきやを考ふる必要ありとせば、妻子のみかは自己も他人も動物も植物も日月星辰も、凡てを抱容する宇宙全體を如何に取扱ふべきかは、一層適切な一層根本な問題であつて、此問題が解決されて初めて妻子に對する問題も自から解決されるやうな次第である。恰も生物學者が動植物は何なりや、如何に取扱ふべき、又如何に取扱へば最も人間の生活と調和を保ち往くことが出來るかなど考ふると同じく、吾等も人生其者に對し宇宙全體に對し、思ひを玆に潜めて初めて意義ある力ある日々の生涯を送ることが出來るのである。

五　物か靈か——功利主義と人格主義

若し吾等の人生觀が、人は他を詐るも他を虐くるも、自己と云ふ六尺の身を愛養することが目的ぢや、いや愛養ぢやない、只欲望の動く儘に其肉體を滿足させればそれでよいと斷定した時に、肉欲主義なる思想が大勢力となつて現はれ、凡ての他人も外物も眼下に見下し、之を肉慾の手段に供するであらう。されど此場合には、始めから吾と他人との間の社會關係を沒却したので、他人を自分と同樣の人格として取扱ふてゐるのではない、所謂自己の野心の踏臺としてゐるのである。自己は自らを人間として取扱ふも、他人は物(己が欲望の手段)として取扱ふのである。然も見よ、自分が人であるならば、自分と同樣に意識し行動し得る他の生物も人であらねばならぬ。若し他人に人格を認めずとせば、

自分にも人格なしと云はれても仕方がない譯で、獸慾主義の人生觀によつて他人を己が欲望の滿足手段と思ふ人は、結局自己自からの人格をも否定せねばならぬ結果を生じ、自家撞着に陷る。さればそは獸慾主義の人生觀か、非社會的になればなるほど、眞理から遠ざかつたものたることを自白するに過ぎぬ。

これに反して其處に、人間の生物的道德的精神的進化向上の跡を歷史的に辿り、人生に內的の意義目的あるを知り、人生の價値と尊嚴を認め、自己の人格を尊重する如く他人の人格を尊重し、他人を取扱ふに自己を取扱ふと同樣な大事大切の觀念、尊敬鄭重の念慮を以てする人格的人生觀ありとせよ。若し此說に從へば吾等は先づ日常生活の經驗から出發し、自己に最も親近なる妻より子に及び、親族、朋友、鄕黨、職業界、國家、世界全人類に社會關係を及ぼし、遂に此世界の現在を可能ならしめ此價値ある人生を創り出した宇宙全體の過去

現在未來に及び、之を人格的に取扱ふ。即ち敬虔尊重の念を以て之に對し、宇宙の萬物を神聖なものと思ふて大事に取扱ふ、玆に始めて、積極的な人生觀あり、積極的な實行の力が湧き出づる、之を吾等は宗敎と云ふ。宗敎とは畢竟最も廣く深く宇宙の凡てと社會的道義的關係を結ばんとする努力の謂ひに外ならぬからだ。

斯の如く先づ自己の生命の尊重より始め、自我主義、獸欲主義の如く只自分の價値のみを認むるのでなく、それ以上に他人他物、遂には宇宙全體の生命の尊重及び神聖化に達する。如何にして之を爲し得るか。古往今來の各宗敎は皆それ宇宙の神聖化に對する人間の努力に外ならぬ。然らば何れの宗敎が最も之に成功したものであるかは自から別問題で、玆には只宇宙に對する吾等の人格的相互的社會的態度が吾等をして正直に眞率に善美の生活にいそしましめる根

據なることを述べて置くのである。同時に、之に反して自己のみを尊重して他人他物を同樣に尊重せぬと云ふ生活の態度、即ち眞に內的に他人他物に對して社會的相互的關係を認めぬ心的態度が、社會の根柢に蟠まる凡ての罪惡醜汚の原頭であることを斷言して憚からぬのである。

六　精神的革命の叫び

勿論、此等二種の態度は孰れが眞理なるか分らぬ。吾等人間の智識は絕對でないから、前者が眞理で後者は全然虛僞なりと斷定することは出來ぬ。然しながら前者が終始一貫せる積極的進步的宗敎的態度なるに反し、後者が明かに非宗敎的自家撞着の態度なることは爭ふべからざる事實である。卽ち後者に從へば、自己のみ尊く神聖にして、他の人他の物はそれ悉く自己の欲望滿足に供する道

具手段に過ぎぬとするのである。が、豈に圖らんや他を手段と見、道具と視、他人を物と見る事によつて、結局自分自からをも一個の物で、人格ではない、他人の欲望の道具手段と見なければならぬことゝなり、一方には自我を積極的に貫徹せんとするも、他の自我を否定せし爲に、遂に自己の尊嚴も價値も否定せねばならぬと云ふ消極觀に陷る。これ自分を偉いと思ふて他人を蔑視する者が、却て他人に蔑視され、自己の品格を下げ、其眞實に偉くないことを證明するのと同樣、自家撞着に陷るは疑ひもないことである。宇宙人生を蔑視し、茶化し、誤魔化し、浮世三分五厘の生活を送る人は、彼れ自からの生命に無限の價値を見出すことは出來ぬ。やはり『三分五厘』位の價しかないから、自ら詐り、自らを濫用し、自らを惡化して何の苦痛も感じない。自らの生命を六尺の身、五十年の時間に短縮して何の不滿も感じ得ない、何の苦痛も感じない、憐むべき生

涯ではないか。

之に反して、人格的人生觀に從へば、自己と共に他を尊重し、神聖にし、宇宙の萬物宇宙の總全に對して敬虔崇仰の態度を以て行動するから、所詮自己をも一層神聖にし、尊嚴にし、宇宙の萬象に價値が增すと共に自己にも價値が增加する、即ち自己に絕對無限の價値を認むることになる。そは誠に前後撞着なき一貫した積極的態度である、人生觀である。噫此敬虔なる態度、これを以て自己に對し、他人に對し、全宇宙に對し、眞面目に正直に自己人格の尊嚴と價値を如實に發揮せんが爲に、日夜勤勉努力奮鬪し、自己に對し、他人に對し、宇宙に對し、助力奉仕の責任、愛と正義の責任を彌益深く强く感ずるに至らざれば日本は救はれない。佛敎と云はず、神道と云はず、將た又クリスト敎と云はず、其何れに據るとするも、吾等日本人が各自內的に心靈の奧底から思ひを

玆に潛め、先づ自己の革新を圖り、內的に精神的に却て目に見へぬ處に一層の注意を傾け、他人に對し、全宇宙に對し、人格的相互的社會的道義的の態度を採りて、日々の思想言動を律するでなければ、日本の社會を廓淸することは出來ぬ。

六千萬の邦人よ、努力せよ、失望する勿れ、光明は諸君の內部にあり。徒に生命の玉を抱いて之を磨かず、犬死すること勿れ。『神は自らを助くるものを助く』と。實行の力、革新の力、奮鬪と努力の力は外より來らず。努力する者にのみ努力あり。願くば吾等をして我が愛する母國の惱みと國民の腐敗墮落が、彼等自身の自覺反省により、速に其跡を絕つに至らんことを神に祈らしめよ。

眞のクリスチャンとは何ぞや

大擧傳道者に寄す

眞のクリスチャンとは何人なりや。虚僞と虚飾に充ち滿てる世は單にクリスチャンなる名目を以て必ずしも其實を得たものと云ふことは出來ぬ。殊に近來諸所方々で、頭に火の附くやうな熱辯を振ひ、幼稚な群衆の虚榮心に訴へてクリスト敎を競賣しつゝある者がある。然り、競賣者は熱心である、恰も狂人の如く熱烈である。彼が快辯の向ふ所半文の價値なき代物(しろもの)を難なく一圓二圓に賣附ける。彼は際物師である、山師である。賣つた者は商人(ビジネスマン)として一時の成功を誇り得べきも、買ふた者こそよい迷惑。私は今玆に競賣のクリスト敎を買ひたる人々に向つて、殊更に『眞のクリスチャンとは何ぞや』の問題を提供したいのである。

而して私は答へて云はん、眞のクリスチャンは必ずしもクリスチャンと名乘るを要しない。彼は必ずしも敎會員ではない。彼は必ずしもアーメン〳〵を云はず、彼は必ずしも祈禱の言葉を知らず、彼は必ずしも十字架の救を信ぜぬ。勿論、彼は敎會の牧師たるを要しない。牧師なる階級は何れ二三世紀の後には其跡を絶つであらう。彼は又大聲叱呼して路傍に踊躍する必要はない。彼は所謂傳道師たるを要せぬ。然り、彼れは普通の人間であつて宜敷い。商人で宜敷い、百姓で宜敷い。炭坑の穴堀りでも、下駄の歯替でも、道路の掃除人でも宜敷い。只彼は平民である、平信徒である。彼は表に佛敎徒と稱し、或は回敎徒と云ふも差支ない。否な、口には無神論を稱ふるも可なり。されど彼は常に敬

虔の念を以て宇宙に對し、常に謙遜の態度を以て他の人格に接する。然り、彼は自己の人格の尊重すべきを知り、その無限大なる價値を知つてゐるが故に、彼は地位や職業や貧富や老若の差違を以て人を遇せず、常に自己と同樣に他の人格を敬重する。

彼は必ずしもイエスの名を知らないであらう。よし知るとも『主よ〳〵』と口癖には云はないであらう。されど彼の生活經驗はイエスと同樣の理想を描かしめ、イエスと同樣なる眞善美の標準を保ち、宇宙の大靈に父の如く相親み、彼と共に働き俱に樂まんとする神祕的の境涯に入り、闇黑と罪惡と虛僞と虛榮とを憎むこと蛇蝎の如く、彼は常に生命の光輝に充ち滿てる理想に憧れて、精進勇往、片時も止まざるの氣慨を湛へてゐる者である。

彼は必ずしも善人ではない、否な、完全の人ではない、彼は未製品である、

或は粗製品である、從て彼は絶ゆる間もなく生長せねばならぬ。然り、彼は生長しつゝある。野獸的、人間的な肉の生活より步々向上の一路を辿つて、道義的、神的な靈の生活に進步しつゝある。彼は其知識に於て、情操に於て、又行道に於て、時に向上の直路を踏みはづして苦難に陷り、時に罪障の谷にはまつて死に瀕することあるも、彼は尙自暴自棄に陷らず、彼が神の理想に對する憧憬は闇中赫灼の光明を與へて、彼をして倍舊の勇氣を起させ、努力奮鬪、彼は遂に彼れの常道に復活し來るのである。然り、彼は多くの欠點を有し、矛盾を包容する。けれど、彼は常に自己の缺陷と矛盾を追究して何處までも之と戰ひ、之に打ち勝たんと努力する者である。彼は惡人ではない、習慣的に惡事を働く者ではないが、時に大惡を行ひ、大罪を敢てする。而も其一旦罪惡と覺るや、彼は只管に憂愁措く能はず、彼が悔悟と悲憤の血は迸つて、彼をして一層熱烈なる理

想の愛求者たらしめ、一層勇敢なる人道の勇士たらしめる。

又彼は常に敬虔の態度を以て宇宙の森羅萬象に對する如く、彼は常に如何にせば彼が抱懷せる愛念を他の爲に有益に使用し得るやに苦心する者である。彼は世捨人ではない、苦行者(アッセチック)ではない。彼は妻を持ちて家庭の人となり、社會の人となり、國家人類の凡てを抱擁して、如何にせば彼等の幸福と向上に貢献するを得るやに就き、日夜思を廻らし、其社會的、人類的理想とする所を活現せんが爲に努力奮闘する者である。彼は必ずしも『福音』を述るものではない、されど常に社會の出來事に注目して、貧者の救濟、勞働の改善、産業界の改革、社會的罪惡の勦滅廓清を企畫し、實行せんと努力する者である。

一言にして掩へは、神を敬ひ、人を愛し、己が人格の社會的向上、即ち社會に於ける自我人格の發展の爲に努力奮闘しつゝある者は悉く、それクリスチャンである。名目は何であつても宜敷い。彼は『求道』や『決心』の札に署名しなくても宜敷い。吾等は實質を要求する。彼が過去の生涯は何であつても宜敷い。只上述の如き抱負と希望を懷いて、常に努力奮闘せんとする人は、悉くそれクリスチャンである。

佛の慈悲と神の愛

佛教にて慈悲と云ひ、クリスト教にて愛と云ふ。其の根本は同一義であらうが、時代思想の變遷と、東西民族の色合とによつて聊か其内容を異にしてゐるやうである。

佛教はクリスト教より少くとも四五百年古い。丁度ユデヤで預言者イザヤやエレミヤなどの顯はれた時代に、印度では釋尊が鹿野苑で轉法輪の獅子吼を擧げてゐられた。ヘブリユの大預言者達がヤアヴェ神の慈悲(マアシイ)を說くに熱心なりしやうに、同時代に顯はれし佛教も、佛の慈悲を著しく高調したのであらう。

由來、慈悲と云ふ語は階級的の言辭であつて、上級の者が下級の者に使ふ言葉である。神は慈悲に富み給ふ、それ故に人類の罪を恕し給ふ。彼等の罪は苛

酷な懲罰に相當するけれど、神は之を憐みて其苦惱を受けしめず、却て彼等を慈しみ給ふ。されど此慈悲の觀念より窺ひ見た神や佛は一個の君主であつて、龍顏拜し難き九重の奥に、威儀泰然と差控へ給ふが如くで、我々凡夫からは甚だ近づき難い神である。何んだか其威嚴に打たれて、誠恐誠惶、遙か末座に慴れ伏して、只お慈悲お情を乞ふの外はないやうである。

然るにイエスの信ぜし神は、もつと平民的且つ無階級的な愛の神であつて、彼は政治的比喩を用ひて一國の國王に譬へんよりは、寧ろ我等と最も親密の關係を有する家庭の慈父に譬へたのである。神は只愛によりて我等を支配し給ふ。我等を慈しみ育て給ふ神は善人にも惡人にも、賢者にも愚者にも等しく慈愛の雨露を注ぎ、化育の日光に浴させ給ふやうに、我等の過失も缺點も罪惡も凡て之を恕し給ふ。勿論、吾等が罪を犯しつゝある間、吾等は其苦しみから免れる

ことは出來ないが、そは神の與へ給ふ懲罰ではない。吾等自身が自身に與へる懲罰である。

此自罰は只神を天父と仰ぎまつりて、彼れの慈愛と恩惠の深甚なるを思へば思ふほど却て深く強く感せられるのである。何となれば神は吾等を恕し給ふ、而して吾等はひどい體刑を受けた方が自分の罪に對して却て心地よく感せられる。『それざまを見ろ、天罰覿面よ、よい氣味だ』と、自業自得の罪に對して自から嘲笑の矢を放ち、聊か安んずることも出來るのであるが、神は尙吾等が如何なる罪をも赦免し給ふと感じて、我等は一層氣の毒でならず、却て心の苦惱を增すのである。但し此苦痛は悅びの苦痛である。而して此悅びの苦惱は吾等をして今後一層忠實に眞率に神を愛し、人を愛して、幾分にてゝ我が過去の罪障を償はんと云ふ自己奉獻（セルフコンセクレエション）の氣分を一層高からしめるのである。

吾等は神を信じ、神を愛し、而して後に神に愛せられるやうになるのではない。神は父である、父なる神は吾等が肉體の父以上に我等を愛し給ふ。肉體の父が吾等の氣付かない前から、卽ち我等が呱々の聲を擧ぐる前から、吾等の體育や敎養、又將來の運命に就て、吾等が成年の後に想像してさへも到底思ひ及ばぬほどな心盡しを以て吾等を愛してくれたやうに、神は全人類の獨り〳〵を、其善惡賢愚肖不肖に拘らず、直接に慈愛し給ふ。吾等が日々の糧を得、日々の業務にいそしむことが出來るのは、皆それ宇宙萬有に內在し給ふ父なる神の恩惠である。

此恩惠の感ありて初めて我等は神を信じ、神を仰ぎ、神の愛に對して吾等も尙神の如き愛者たらんことを希ふやうになるのである。此恩惠の著しき表現を或者は十字架のイエスに見出し、或者は彌陀の四十八願に見るであらう。又或者

は却て各自の小さき日々の經驗の内に神の恩惠の普ねきを見て、歎異の情に心躍るを覺へるであらう。併し共に感恩の念なるは勿論で、此恩寵の感じが無くしては、神に對する眞の信仰は發生しないのである。

信仰は神の恩惠に對する我等の信認(ツラスト)である。此信認ありて初めて吾等は神の恩寵に背かざらんが爲に、全心全靈を捧げて神に奉仕し、神の如き完き人格を養成し、神の如き慈愛深き一個の靈的實在としての價値を發輝しようと努力するのである、奮鬪するのである。

偉人崇拜と宗教

一　教祖崇拜と救拯の神

宗教の一面は慥に英雄崇拜である。クリスト教からイエスを除き、佛教から釋迦牟尼を除き、回々教からモハメットを除き去つたならば果して何が殘るであらう。釋迦牟尼去つて佛教は出で、イエス去つてクリスト教は生れた。今佛教の教理の發展に就いては之を略し、少しくクリスト教の教義史を研究せし者は直に氣付くであらう、從來のクリスト教はイエスの教でなくして、イエスに就いての教なりしことを。

イエスの歿後間もなく、イエスは當時世人の期待せし復活の神、救世主と同

一視され、神の子又は神御自身の受肉(インカアネエト)されたもので、人間の罪を贖はんが爲めに此世に下り來りて、人類の爲めにあらゆる苦難を受け、遂に十字架の責苦に遇ふて死に給ふた、但し素と〳〵永久不滅の神、又は神の子なるが故に、彼に永久の死あることは出來ぬ、處で三日目に蘇生し昇天されたと、當時のクリスチャンは信じてゐた。これクリスト神話の概要であつて、所謂正統派の教徒は今も尙此事を歴史的事實として信じてゐるのである。加之、彼等は只此事を信ずることによつて邪惡の軛から救はれ、死してはクリストの如く復活昇天して、永遠の生命を得ると思ふてゐるのである。

今日の科學や哲學に教育された吾等は右の如き荒唐無稽な神話(ミス)を歴史上の事實として信ずることは出來ぬ。併し右の神話的教條が過去二千年間、歐米思想の中心となり、文明の發達に偉大なる感化(其善惡に拘らず)を與へたことだけ

は歴史上の事實で、爭ふことは出來ぬ。

然らば如何にして、そんな荒唐無稽の說話が眞理となるに至つたか、即ち如何にして嘘から眞が出たか、先づその原因と條件とを問ふて見たいのである。ユデヤ國の末路は慘憺たるもので、ペアシヤ人やエヂプト人やグリシヤ人やロオマ人に蹂躙されて、亡國の非運人力の能く挽回するに由なく、國民は天に慟哭して神の救ひを乞ふた。これクリストなる思想發生の由來で、クリストとは王者の義である、他國の暴君に虐げられた國民は如何にしてか英雄王出で來り、彼等の仇を復するならんと干魃の時雲霓を望むが如く大王の出現を期待せしは人情の自然で、宗教的なりしユデヤ民族は幸も禍も皆それ神の業と思ひしが故に、今や國難渋集して、人力遂に何するものぞと、失望落膽の淵に沈める彼等は、勢ひ彼等の救助者を神に求め、ヤアヴエ神は彼の撰民イスラエル民族の

爲めに救濟者を送り給ふに違ひない、神は即ち不世出の大王を送つて、此の頽廢せる國民を塗炭の苦より救ひ出し給はんと渴望してゐた。これは單にユデヤのみでなく、紀元前後一世紀の頃はグリシヤもバビロニヤもエヂプトも一般に頽廢(デカダン)の時代で、人間の威力に自信を失ひ、人は運命の手に弄される傀儡のやうに思はれてゐたから、此運命の苛酷なる繩縛を弛めんには人間業では出來ない。世は罪業に滿ち充ちて惡は榮え善は衰ふ。人は轗軻落魄の底に沈んで意氣銷沈、自分の罪を悔ゆるも改善の勇氣なく、只逡巡して無意義に此世を送る。

斯る沈滯を覺醒せんとて、神經過敏なる憂國の士は、警鐘を鳴らして國民の元氣を鼓舞せんとする誠に已むを得ぬ次第で、人間の精神生活の復活を圖らんが爲めに、古代の神話に現はれた復活の神を舁ぎ出し、其利益(りやく)によつて一足飛びに、沈滯せる冬枯の氣分から、春陽駘蕩たる百花爛熳の樂天地に馳け込まんと

する生命の欲求は、思ひ合せたやうに世界各國に於て救世主を求めつゝあつた。而してこれらは皆新緣の神、春の神、復活の神であつた。バビロニヤのタンムズ、シリヤのアドニス、フリヂヤのアチス、エヂプトのオシリス、グリシヤのシビル或はデイオニサス（酒の神、葡萄の神、元氣興奮の神）等皆な之れに屬する、ロオマの如きは其國王オウガスタス シイザアを救世主として殆ど崇拜してゐた。又印度の佛教思想にも此頃アスヴアゴシヤの經典に、法藏菩薩の四十八願とやら云つて、衆生濟度の爲めに神が地獄の責苦を嘗め、衆生の罪の身代りに立ち給ふたと云ふ話がある。沈滯せる生活には更生の情猛烈に襲ひ來り、吾等は到底生れ更らねば此罪此惡より解脫することは出來ぬと思ふやうになり、神が吾等の爲に死し、且再生を得給ふことによつてのみ、吾等も其餘澤を被つて更生を得るといふ思想に來つた。他力信心の起りは玆にある。

即ち吾等は衆生濟度の祈願をかけられしほどの慈悲深い阿彌陀佛を信じ、佛に全心を込めて便つて居れば、必ず成佛すると云ふ說は、恰もクリスト敎に於て十字架上のクリストが全人類の罪を擔ふて、肉に死し靈に復活し給ふたから、人はクリストの神なりしことを信じ、彼を救世主と仰ぎ、彼を主として事へたならば、必ず天國に往くことが出來ると云ふのと同じ筆法で、且つ同じ時代（共に第一世紀頃の東洋に起つた宗敎思想）の產物である。されば若し佛敎徒にしてクリスト敎のクリスト即神說は虛僞なりと云ふ者あらば、そは自から法藏菩薩の心願を一個の神話なりとして排斥するものである。又クリスト敎徒にして、眞宗の敎條なる阿彌陀如來の救ひは信仰の產物で、歷史的の價値なしと云はゞ、彼等自からのクリストも信仰上の產物であつて、歷史的の價値は無いものと白狀せねばならぬ。

二　イエスの神化とクリスト

吾等は曰はん、以上の救濟觀は佛敎に於ても、クリスト敎に於ても、共に荒唐無稽の傳說であつて、クリスト敎に於ける間違の起因は、ナザレ村の大工の子にして宗敎的大天才なりしイエスの人格を敬慕するの餘り、彼を神化し、彼を民衆の希待せしクリストなり救世主なりと稱し、彼が英雄的犧牲の死を以て直に神の死及復活と見做し、愚夫愚婦の信仰を收攬したことに基づいてゐる。勿論クリストの神性を信じ、其復活を主張せしパウロは一の宗敎的天才で　彼れがクリストに對する尊信の厚かりしことは、單に彼れが世界的大傳道の勇猛心を奮起した直接の原因であるのみならず、彼れがクリストに對する信仰は忽ち同時代の人の靈火となつて、全歐の天地を燒き淸めた。げにクリスト敎はク

リストの教を根本とせるよりも、寧ろクリストに關するパウロの教を基礎としてゐると云つてもよい位である。パウロのクリスト卽ちイエスの神化されたクリスト崇拜は其時代精神に育(はぐ)まれた英雄崇拜の一樣式で、日本に於ても過去の時代には殆んど凡ての英雄豪傑を神に祭つた。菅原道眞は天滿宮となり、德川家康は權現樣となつてゐるのと同樣、人文發展の途上、何れの國に於ても在り觸れた現象である。

然らば英雄崇拜は凡てそれ人間生活をなせし人間を捕へて之を理想化し、其美は一層之を美化し、其過誤は却て意義あるものゝ如く善意に解釋し、遂に彼等を神として又は神の受肉(インカアネエション)として其膝下に脆づくでなければ、崇拜と稱するに足らぬのであるか。私は今、近代人の立場から眞の英雄崇拜と其當否を聊か論評したいのである。

近代、史科學の發展と共に、吾等は一も二もなく事實に根據を置くやうになつた。又道德上に於ても、如何に其道德的感念强く道義の理想高潔なるも、事實に於て道義的ならざる人は決して吾等の尊信を受くる價値はない。吾等は先づ事實を要求する。されば菅原道眞が天滿宮として崇拜される價値ありや否なやは、寧ろ理想化された天滿宮に往かず、先づ菅原道眞なる史的人物が果して崇拜に値ひする人格なりしや否なやを研究せねばならぬ。之れと同樣に吾等はパウロやオウガスチンやルウタアによりて理想化されたクリストを棄て、其神話的信仰の根元なるナザレのイエスが如何なる人格なりしや、先づ之を知りたいのである。

イエスの弟子達は彼れの偉大なる人格に打たれて目を舞はし、彼を以て神の現顯、神の人間化と思ふてゐた。彼等が幼稚な頭腦で解釋したイエスは人間で

はなく、神が人間に化けて人間の罪業を滅さんが爲めに此世に下り、あらゆる苦難を嘗めて遂に十字架に上り給ふたのであつた。但し神に永久の死あることは出來ぬから、三日目に蘇り給ふた。故に人間は神が如何に人間の爲に御意を惱まし、如何に人間を愛し給ふか、卽ち『神は其獨りの生の子を吾等に與へ給ふほど此世を愛し給ふ』ことを思つて、只管信仰の道を辿らねばならぬと彼等は思ふてゐたのである。これ一個の說話としては可なるべきも、近代人の眼を以て見れば、そは一個の茶番狂言で、宇宙人生の大事を狂言化したものに過ぎぬ。從つてクリストは人間に扮裝した一個の俳優で、素と〳〵完全の神なるが故に苦しみあるべきにあらぬを贖罪の爲めに苦んだ眞似をし、死あるべきにあらぬを死んだ眞似をして罪業撲滅のお芝居をなされたのである。イエス若しそれが爲に受肉して此世に下り給ふたのであれば、もう初めから結末はちやんと分り

切つてゐる劇の一役を勤むると何のちがふ所があらう。これ畢竟イエスを機械的に且つお役目的に見たもので、昔の人は之を以て彼れの神性を證明せんとするも、今の人は之れあるが爲めに却て彼れの價値を疑ふ。

三　吾等の英雄崇拜

吾等は偉人を崇拜する、そは事實である。何故に偉人を崇拜する？　そは一概に云ひ難からんも、內なる生命の欲求により、一層大きな、一層偉大な、一層自由な、一層豐富な生涯を送らうとする者が、過去に於て偉大な豐富な高尙な生涯を送つた人を見て、其人を師とし友として、敬慕尊信措く能はず、彼れにあやかりたい、彼れに似たいと思ふは人情の自然で、若し吾等に人格崇拜の事實がなかつたならば、敎育の事遂に語るべからずと云ふべきである。吾等が幼少

の時代、覺束なくも道義的善惡の標準を立て、良心の判斷を重ずるに至つたのも、皆これ偉人崇拜の感化の致す處である。吾等の幼時には先づ父母をば最もゑらい人と思ひ、一々彼等の言行を眞似た。稍長ずるに及んで、父母以外に英雄が澤山出來て、豐臣秀吉、加藤清正、宮本武藏、彼等は實にゑらい、彼等のやうになりたいと思つた。尙齡を重ねては吾等は寧ろ政治的の天才を崇拜するやうになり、ワシントンやリンコオンなどがナポレオンやアレキサンダアよりも偉いと思はれ、後者に似んよりも寧ろ前者に似んことを努めた。一層思想の發達するに從つてカアライルやブラウニングやゲエテやセクスピヤが理想の人物となり、一層進んでソクラテスやトルストイの如き靈界の偉人を崇拜するやうになつた。殊に數年前物故せしトルストイの如きは如何に私の崇敬と尊信を一身に蒐めてゐたか知れぬ。彼れは恐らくイエス以來の最大偉人で、彼は單に

思想上の偉人であつたばかりでなく、同時に實行上の偉人であつた。彼れはルシアの腐敗した貴族社會に生れて、所謂罪業の柵に繫がれ、邪惡の深淵に投入れられしも、尙彼れが止み難き精神生活向上の一念は彼をして單純なる百姓主義、平民主義 博愛主義に復活の曙光を認めさせた。彼はかの如く奮鬪し、かの如く惡戰して八十幾年の長生涯を血と涙とを以て送つた。人道の勇士、理想の熱求者として實に彼の如きはなかつた。

而も見よ、彼れの稱へ且つ實行した愛敵主義、平和主義、博愛主義は皆それイエスの敎を受け繼ひだもので、吾等今イエスを神として崇拜したパウロの宗敎と、イエスを人と見て崇拜したトルストイの宗敎とを比較するに、そこに爭はれぬ時代精神の異りかほのめいてゐる。吾等はトルストイが單に理智の人なりしが故に、さうだつたと見ることは出來ぬ。彼に人生の哲學ありし如く、パ

ウロにも一層議論じみた神學があつた。吾等は又必しもパウロを以てイエスの主義に叶つた唯一の宗教的天才だと云ふことは出來ぬ。トルストイは二千年間進歩した科學や哲學を後にして、尙歷史的イエスの偉大を認め、彼の單純な愛の福音を以て人生絕對の眞理とし、之を吾が身に、また吾世に實現せんと努力した。其努力奮鬪の偉大なりしは決してパウロの世界的傳道に勝さるとも劣りはしない。而して共にイエスの偉大なる人格に啓發されて斯の如き熱情、斯の如き奮鬪の勇姿を吾等に示してゐるのは二者同一である。只時代の異りは前者をしてイエスを神と思はしめ、後者をして人間の最も偉大なるものと思はしめた。一は神の子なるが故に、其力によりて吾等は罪障より救はると叫び、他は完全の人格なるが故に吾等の生活の伴侶とし道友とし模範とすべしと主張した。前者は人間の威力を侮蔑した頽廢時代の產物で、後者は彌益自然に打勝つて進

み往く文明の世、人間の威力が讃美高調されてゐる現代的の產物である。前者が悲觀的な時代精神を鞭韃するに頗る樂觀的なりし如く、後者が樂觀的に勝ち誇れる現代を戒むるに頗る沈痛なりしは已むを得ぬ次第で、何れもそこに時代を超越せんとした努力の現はれてゐることは、疑ひもなき事實である。

四　偉人崇拜と靈的向上

そは兎に角、パウロ一派のクリスチャンはナザレのイエスを萬民の王、即ちクリストと信じ救世主と仰ぐことによりて人間の罪障から免がれ、再生又は永世の保障を得ると思ふてゐたが、トルストイ及一派の現代人は常に罪の憂苦から免がれんとする消極的情態にあるものではなく、常に進歩的に積極的に一層偉大なる人格一層偉大なる人道の勇士たらんとするものなるが故に、初代のク

リスチャンの如く、他力信心を以て滿足するものではない。現にニイチエがクリスト教を罵倒して奴隷の道德と叫んだやうに、人間の威力を蔑視した昔のクリスト教は誠に弱者の道德であつて、罪人の宗教であつた。今や吾等は教育にも『勿れ主義』を使はず、子供に惡をすな〳〵と戒めず、只善を爲せ〳〵と勸めて惡戯をなすの暇なからしめんと勉めてゐる。政治社會のことも同樣、惡を矯め又これを清めんとするよりも、即ち貧民救助や紅燈街の撲滅を事とするよりも、寧ろ徒弟學校や圖書館を起し、貧民の子弟を教育して殖産興業の道を教へ、貧と罪とを未發に防がんとし、また病を治せんことのみよりも寧ろ衛生の道を訓へて病を未發に防がんとしてゐる。これ一に善を勸めて惡に陷るの暇なからしめんとする積極主義の致す處である。

而して此積極主義の背後には必ず獨立自尊の人格を敬重する近代主義が蟠まつてゐることを忘れてはならぬ。今や吾等は人間の體面として自分自身の努力なく、只他(他人又は神)を便りとして幸福を得ようとか、罪の生涯より免がれ去らうと云ふやうな卑劣な考へを持つことは出來ぬ。吾等は自分の努力奮鬪により自分の改革自分の向上發展を計る。其如何にして之を爲すかに就いて參考となり、刺戟となり、鞭韃となり、督勵となり、又慰藉となる者は古往今來歷史に現はれた偉大なる人格で、吾等は釋迦を思ひ、ソクラテスを思ひ、孔子を思ひ、マホメットを思ひ、パウロを思ひ、オウガスチンを思ひ ルウタアを思ひ、トルストイを思ふ毎に、如何に吾等は吾等の道義的勇猛心を皷吹されることよ。如何に宗教的渴仰心を促進されることよ。彼等の靈、吾等の靈と呼吸相通じ、靈交相結んで、吾等の精神的生命は頓に成長增大せるを思はざる能はぬ。

吾等は最早パウロと共に、神としてのクリストを信ずることは出來ぬ。トル

ストイと共に人間の模範としてのイエスを信じ、彼れが人間的努力の偉大を感じ、吾等は如何にもして彼れの氣高い人格にあやかりたいと思ふ。其千分の一萬分の一だも我が物としたいと思ふ。如何にして吾等がかほどまで敬慕する偉大な一人格がナザレの僻村に大工の子として產れたか、其理由も因緣も知らぬ。併し彼れは生れながらの聖人ではなかつた。彼れには修養の跡歷々たるものがある。乞ふ左の事實を見よ。

五　靈界の偉人イエスの生涯

イエスは初め洗禮のヨハネの弟子となつて、ヨルダンの片邊りで洗禮を受けた。彼れは彼れの師と同じく『悔ひ改めよ、天國は近けり』といふ消極主義から出た樂觀的の言辭を以て、心靈救濟の道途に上つた。彼れが身邊に蝟集し來

る多くの靈や肉の誘惑に打勝つ爲に、どれだけの苦悶奮鬪を經たかは、マタイ傳及ルカ傳中の三個の誘惑に暗示されてゐる。彼が傳道事業の爲に東奔西走するや、家も身も忘れた南船北馬の大活躍は、偶ま彼を訪ねて來た彼れの母及兄弟に云ひし言葉で明らかである。曰く、吾が母とは誰れぞや、兄弟とは誰れぞや、吾が言を信じ、吾が敎に從ふものは皆それ我が母なり、我が兄弟なりと。イエスが如何に己が理想を求むるに熱烈なりしかは、只此一言を以てするも容易に知ることが出來る。彼は無抵抗主義の福音を傳へ、人種民族を超越した愛憐主義（善きサマリヤ人の話）を稱へ、惡に敵する勿れ、汝の敵を愛せよ、汝を愛する者を愛するは當然のことだ。惡人でもそれ位のことは知つてゐる。汝を憎む者を愛し、汝を憎む者に善をなせ、而して神の完きが如く完き人格となれと。斯の如き高い道德を說いたものは、少くとも彼れ以前にはなかつた。

而も彼は單に斯る道德を高調した言論の人ではなかつた。彼は先づ實行の人であつた。彼は平民の友、貧民の慰藉、罪人の益友であつた。彼れの友として交際せしものは漁夫や百姓や、又國人の共に齒するを愧ぢとした稅吏や罪人(ヤアヴエ神の律法を守らぬ人)の類であつて、彼は社會の棄民と寐食を共にし、此憐れな人々に人生向上の福音を傳へたのである。

されど彼れの敎は餘りに高尙に、彼れの行動は餘りに當時の常識を逸し、彼れの人格は時代の寵兒たるべく餘りに稜々乎として萬代に聳えてゐた。從つて、彼れの偉大を見得なかつた當代の上流社會及宗敎界は彼を迫害して止まなかつた。されど彼は萬民の敵對迫害をも厭はず、却て百倍の勇氣を鼓舞し、いでやこれからは腐敗したユデヤ敎の本據を衝いて、其害毒を根本から苅取らうと云ふ意氣込みで、住み馴れた山水明媚のガリレヤを去つて、ユデヤの都エル

サレムの神殿指して遠征の途に上つた。

時は恰も踰越節(すぎこしいはひ)の前日、ヤアヴエ神の大祭に全國から集つて來た國民に向つて、或は殿堂の前、或は街路の傍、さては知人の住宅などにて、彼は畢生の力を罩めて福音を宣傳した。而も憐むべし、彼れの立場を理解することの出來なかつた國民の指導者達は彼をば神を冒瀆する似是非豫言者となし、遂に十字架の刑に處した。彼れ死に臨んで曰く、『神よ願くば此(死)杯を取去り給へ、併し我が意をなすにあらず、御意(こころ)の儘に』と。此一言如何に彼れが理想の爲に最後まで奮鬪を續けたかを示すものであるよ。彼れは尙生き永らへて凡俗な民衆を敎導したい、今我れ死なば、我がやりかけた事業は如何になり往くらん、幾多の弟子達がないでもないが、彼等多くば無學無識の正直者で、我が意の何れにあるかを解し得る者ではない。嗚呼今少し生き長らへて彼等を敎育したいも

のだ。併し我今十字架上の露と消ゆるは、我が言行の一致を全ふし、我が教の眞理なることを證明するものではあるまいか。さらば死は生にも優さる我が事業の完成（コンサムメエシヨン）なりと思ふて、最早死を厭ふべきにあらず、神意のなるが儘に任せんと神に祈禱を捧げて、從容として死に就いたものと思はれる。（委細のことは讀者自から共觀福音書に就いて御研究あらんことを望む）

彼れが三十餘年の短生涯、そは如何に詩的で、而も如何に眞面目に、如何に眞率に、如何に人生の各方面に於て波瀾ある生涯を代表せしことよ。我等は彼れの生涯に私淑し、彼れの經驗に參して無限に新らしい啓示を得、無限に新らしい生の活力を得る。誠にルナンが云つたやうに、彼れほど忠實に熱心に此世の歡樂を棄て、幸福を棄てゝ只管人生の改善と進歩向上の爲に畢生を捧げて努力分碎し、我が家を忘れ、我が身を忘れて只管己が理想の社會を建設せんと日

夜黽勉奮鬪した者はないと。（讀者乞ふルナンの「イエス傳」を熟讀せよ）

彼は現世の些事に齷齪たらず、常に宇宙の太極を眺めて世に處した。彼れは時と場所とを超越して、自由に人生の理想を述べ、且つ之を實行した、彼は常に悠々自適、從容迫らず、意氣天を呑み、大事に驚かず、小事を侮らず、愛と誠實と、正義と謙遜と、勇氣と柔和とを以て世に處し人を導ひた。

吾等はイエスの氣高い生涯と己があやふやな生涯と比較して常に忸怩たらざるを得ない者である。吾等嗚呼如何なれば斯く煩惱の犬に驅られて、色々な欲望に誘惑されることよ。如何なれば此身を捧げ此靈を率ひて世道人心の頽廢に反抗し、人生の向上發展を計ることに努力しないのであらうか。斯く思ふ毎に吾等は一層英雄崇拜の切實なる必要を認め、朝夕史上に現はれた偉大な人格を渴仰して、彼等の言行に肉薄し、遂には彼等以上の人格を修養して、歷史的發展

の意義と人生の進化向上を完ふせんことを希ふ。英雄崇拜は實に人格の向上を計る修道の士の片時も缺くべからざる靈の糧である、宗教の一面である。

藝術美と宗教美

グリシヤ式の愛とヘブリユ式の愛

私は嘗て云つた(『神とX』參照)、藝術的の愛は美の感想をその根元としてゐるが、斯る愛は美の移ろひと共に褪せ去るべき浮薄の愛であると。美は藝術の獨占ではない。世には藝術美以上に消魂のわなゝき、恍惚の思ひあらしめる宗教美の豐麗なるものあるを忘れてはならぬ。私は今兩者の區別を明かにして讀者の一餐に供したいのである。

吾等はフヒデヤスやロダンの彫刻、ラフアエルやミケランゼロの繪畫、ベトオヴエンやワグナアの音樂、セクスピヤやゲエテの詩、モリエルやツアゲネフ

の小説を讀んで、其美感に打たれざるを得ない。彼等が描出した自然や人生の叙景叙述は如何に美はしくあるよ！　我等は彼等の藝術に對する時恍惚として我を忘れ、彼等が感得せし美の内に融合して、轉た消魂の念ひに堪へぬ。又宇宙の大藝術なる自然其儘の美趣、即ち月や花や星や雪や、將た又、崇嚴なる山岳、洋々たる海潮、欝々たる森林、茫漠たる平原、旭日さす町、夕暮の村、一として其獨特の美を發輝せざるはなく、田園詩人バアンスや自然詩人ワアヅウオースの心を以てせば、何れか美的憧憬の對象とならぬものがあらう。

されど藝術の與へる美は到底浮薄な悦樂の心と相離れることは出來ぬ。如何に崇高な自然の活畫も、如何に優婉な人情の美も、それが『藝術の爲めの藝術"Art for art's sake"』として描かれた時、我等は之を見て、よし自我の存在を忘れ、當面の美觀に我が魂を打込んで、藝術の對象中に沒入し、融合し、悦樂の

限りを盡して尚感興つきせぬ夢心地となることが出來るとするも、其感興の極致に於てさへ、藝術の與ふる美の愛慕には尚一點の淋し味を加へざる能はぬ。そは誠に詩人シエレイが雲雀の讃歌に歌つたやうに、『汝は愛す——而も汝は愛の悲しき飽滿（サタエティ）を知らず』と。これ鳥に事寄せて藝術的な浪漫的な人間の戀愛の移ろい易きを嘆じた言葉である。人は如何に藝術美の三昧に沒頭するも、到底そこに屈竟の慰安を見出すことは出來ぬ。そは何故であらうか。偉人トルストイが「戰爭と平和」や「アンナ　カレニナ」の大著述に成功して、尚『藝術の爲めの藝術』に滿足する能はず、勝ち誇れる靈の奥底に尚空虚を感じて遂に藝術界を飛出したやうに、藝術美は所詮我等が眞の愛を繫ぐに足らぬ不完全のものなるが故である。

吾等が若き乙女の美はしき姿を見て愛の憧れに耽る。而もそが悦樂の心を超

越して、宗教的渇仰に入らざる限り、そは畢竟浮薄の愛である。然り、そは彼女を一個の藝術的作品として其美を鑑賞する浪漫的の戀に過ぎない。詩人が描きし人情美の至醇なるものも、屢々讀者の藝術的鑑賞に弄されて享樂の對象となり、所謂自然主義や肉慾主義の挑發となるに過ぎぬ。之をこれ吾等はグリシャ式の愛と云ふ。蓋しそは自然及藝術に對し、單に悅樂の氣分を以てする愛なるが故である。

之に反しヘブリウ式の愛は常に恩寵の感じに愛の源泉を見出してゐる。ユデヤ民族の宗教經驗は、彼等が神の選民として、他民族に異りて特別の恩寵に預つてゐるといふ意識に基いてゐた。されば彼等が幸福繁榮の經驗は凡てそれ神の惠みの致す處と思ひ、罪障苦難の經驗も亦、神の選民として特別の使命を有する彼等に特別の試練を與へ、彼等の大成を期し給ふ神の恩寵として感謝の念

を以て之を迎へた。これ卽ち宗教美の基本である。神の恩寵！　然り、自然の美も、凡てそれ神の恩寵として吾等は之を受け容れるだけである。吾等は必しも自から愛を致すにあらず、神の恩寵を罪の此身に泌み〴〵と感得して、只感恩の誠を捧ぐ、私は之を稱して宗教的の愛と名づくるのである。

そは藝術的の愛の如く、自我の意識を沒却してまでも美の悅樂に消え入るのではない。宗教美の渇仰は苦難と罪障の谷間に介在せる自我の深甚なる意識の內に、自然の美を眺め、人情の美を感じ、凡て之を神の恩寵として感謝の涙を以て拜受し、感泣の內に自己犧牲の献身的活躍に赴く。然り、吾等は先づ我生命の恩賞を感じ、血肉の妻子親兄弟や、靈の知己、道友に敬愛されると感じて一層感恩の念に堪へず、身に餘る法悅の感じは到底吾等をして安閑と享樂の巷に徘徊させず、奮勵一番、他の爲め、世の爲めに、身を挺んでゝ聖き愛の誠を

捧げんと思はしむるに至る。パウロの所謂『クリストの愛、我を餘儀なくせしむ』とは實に此宗教美の渇仰を言ひ得て妙なるものではないか。

藝術美の憧憬は自我を忘れて渾然、美の中に融合するが如きも、所詮そは自我の欲求に云ひ知らぬ淋しみを感ぜざる能はぬ浮薄の愛である。然るに、宗教美の渇仰は自我の熾烈なる意識に基いて、徹底的に自我の欲求を肯定し、若し此の深刻なる自我の肯定が眞率誠實の態度からでたものであつたならば、當然其内より湧發すべき他我一切に對する恩寵の感じに自我の更生を促がし、不退轉の精進、以て善美の理想を出來得る限り己が人格の内に實現し、宇宙の大靈に融合して、幾何にても天地創造進化の偉業に參加せんと努力奮鬪させるやうのものである。前者は卽ち靜的の盲愛であつて、果敢なき空花のそれの如く憐れに、よし一時の情的欲求に過激の滿足を購ひ得んも、到底久遠の法悅を贏ち

得るものではない。後者は所詮動的の聖愛であつて、常に光明に輝き、自他融合の活生涯に生の充實を齎して、人生の意義を完ふさせる。前者は自我を忘れて却て小我の悅樂に囚はれ、後者は自我を求めて却て宇宙の大我に生く。さらば吾等は單に藝術美の愛を以て滿足することなく、早晩、いや一刻も早く、宗教美の愛に渇仰の誠を致さねばならぬ。

人生の目的

一　地球丸の船客

吾れ今此瞬間の一髪を界線として、限り無き永劫の過去を後ろにし、果てし無き永劫の未來を思ふ。空々漠々たる時劫の原野、退かんと欲して退く能はず、進まんと欲するも亦躊躇なき能はず、敢て問ふ吾は何れへ往くのであるかと。

人は『永劫』の濱に打上げられし一片の靈魂、處定めぬ旅人の如く、瓢然として來り、瓢然として去る。否否、吾等は恰も航海者の如く、地球丸なる巨船に乘じ、太陽丸なる親船に伴はれ、限り無き空間の波を蹴立てゝ、何れへか航行

しつゝあるではないか。凡ての星辰は我等の友船である。天文學者の云ふ所に從へば、月は地球の周圍を廻ぐり、地球は太陽の周圍に一定の軌道を描いて、年々歳々同じ事を繰返へすやうだが、一たび經過した空間をば再び航行することは決して無いと。そは太陽自身が其家族なる地球や月や其他幾千の星體を引卒して、一秒時間十一哩かの速力で、航行しつゝあるからであると。仰ぎ見る無數の星辰、中には我が太陽系統に類する無數の星系が在つて、等しく限りなき空間の海を航行しつゝある。落着く所は何所なるべき。もし宇宙に限界かあつたならば、彼等が最終の港有るべきも、否、もし其限界が破壞し難き鐵壁であつたならば、凡ての星晨は此宇宙の外壁にぶちつかつて破滅に終るかも知れぬ。今の所宇宙に外壁あるを認めた天文學者もないやうだから、先づ其心配は入らないやうなものゝ、これら無數の星系が如何にして相衝突することなく、

整然たる秩序を以て眞帆片帆、點々交錯、宇宙の波に入り亂れ、日夜其航海を繼續し得るのであらうか。そは引力の均衡に由るのだと、一言に答へ去れば何の不思議もないやうだが、引力の均衡其者が實に不思議な現象であるから仕方がない。如何にして此均衡を保つに至つたのであるか、そは偶然であるか、又は目的あつて然るのであるか、どうも答案に苦しまざるを得ない。

二　不可思議なる生の靈動

宇宙の大を云へば限りなく、頭腦がぼんやりとして浮雲の上に漂ふてゐるやうな氣がするから、さう云ふ話は止してくれと、諸君は注文するかも知れぬ。然り、吾等は漂ふてゐるのである。吾等は空間の波の上、地球船中に搖られてゐることを片時も忘れてはならぬ。されど大を云ふことが嫌ひなれば、ちと小

を云つて見よう。假りに人肉の一片を取り、仔細に之を點檢するに、そは無數の顯微鏡的細胞から成立つてゐるとの事。而して其細胞も單純なる有機體ではなく、至極複雜なる組織體で、外部は比較的單純の物質であるが、中心に濃厚なる核實があり、核實の內に眞田帶見たやうな染色體がある。此染色體は糸帶にからまれたる染色球の連環であつて、此染色球も亦一個の複雜なる組織的有機體なる由だが、其如何なる組成體なるやは、生物學者が一生懸命に研究せる所なるも、如何せん、最高度(三千倍)の顯微鏡でも見出すことは出來ない悲しさ口惜しさ。此の如き體細胞と、子孫繁殖を司る種の細胞とは、大さと內容に於て大に異れども、其組織は同一である。今反對に、顯微鏡的種の細胞からして、人間の發生する楷梯を概括的に略述すれば、先づ斯樣である。兩性の種細胞が抱合して一個の細胞となり、それが二分四分八分し、後には無數の細胞の

集合團となる。其分裂するや、原細胞の核心なる染色體中の十六個の染色球（人體の何れの細胞にも十六個あるが、種細胞中には八個しかない、兩性抱合した時十六個となる）が一個々々眞二つに割れて、新らしく出來た各個の細胞中に必ず十六個を保存してゐるさうだ。誠に巧妙な仕掛ではないか。扨て此無數の細胞團が、後に椀形から卵形の德利體に變じ、外、間、內の三層に分解されるさうで、此三層中、外層は後に神經や皮膚となり、間層は筋骨や血管に變じ、內層は消化器等に發生し往くさうだ。而して此卵形の德利の口が漸く狹少になり往きて、終に一道の管穴となる。後、管の絕頂が三部に分たれ、下端は背椎神經となり、中部は小腦、上端は大腦となる。併し卵時代に於ける一道の管孔は永へに充塞されることなく、二個の鼻孔となつて、今猶諸君の顏面に殘つてゐるとのこと。其の發展の經路を詳述すれば、大部の書冊を以てしても容易に

述べ盡すことは出來まい。よし出來た所で、そは只發展の經路を叙述するまでで、そは偶然に然るのであるか、或は有目的に然るのであるか、科學者の回答し得るところではない。哲學者と雖も亦容易に答案を下す能はざる所であらう。

三　有目的か無目的か

草木も、動物も同じく細胞の分裂、增殖、變化、發展の結果である。花は咲き花は散る、人は生れ人は死す。散るべきの花なれば咲かぬが優しではないか。死ぬべき人間なれば、始めから生れぬが勝しではないか。何のいたづら心から造化は而かく複雜の方法に依りて、單細胞から卵を造り、胎兒と爲し、生兒と爲し、したゝか親に厄介を掛けさせて、幼年、少年、青年と爲し、成人、老人の域を經て、遂に吾等を墓場に下すのであるか。沙翁は云つた『人は暫らく土

の上に蠢めき、土をいぢつて生きてゐるが、忽ちにして土の下に埋まる』と。

然り、吾等は地球の船に乘つてゐると云つた。何れの港で乘込んだのかのしらん？　吾れの來るや只一人であつた。外に乘客がないのではない、そは澤山だ。親と云ひ、友と云ひ、妻と云ひ、子と云ひ、孫と呼ぶ。併し何れの港でか吾等はこの船を去らねばならぬ。吾れの去るややはり只一人である。後ろに永劫の時を控へ、前に永劫の時を迎ふ、我が五十年、百年の航海は敢て長いとも思はれぬ。さらば吾等が此世の生活、そは全然無目的であるか、或は何か爲にする所あるのであるか。所詮答案は目的、無目的中何れか一とつで、別に第三案あるを許さぬ。併し目的、無目的の兩說に付き、相當の證據があがらぬ以上は、遂に假定に終らざるを得ぬ。純理を尙ぶ數學者はXやYなる假定を設けて立式運算の結果、Xの價値を見出すやうな便法を知つてゐる。吾等も同じ法式

に從つて、人生は無目的也、無意義也として式を立てゝ見たら、どうだ。然り吾等の先輩なる大哲ショーペンハワーは嘗て立派な人生式を立てた。玆には寧ろ短的に彼れの定式を紹介したが優しであらう。曰く、人生は無意義なり、無目的なり、故に此世に生れざりしことが最大の幸福なり、但し一旦生れ落ちた以上は、一刻も早く死去ることが最大の幸福であると。なるほど巧妙な云ひ振りである。それでは、此の說の主人公は直に自殺して、最大幸福を求めたかと聞けば、爾來數十年、白髮を掩ひ被るまで生きてゐたとのこと。して見るとやはり最後の答案は、最初の假定なるX＝零、卽ち人生の目的＝皆無とは全然異る或者なりしこと爭ふべくもあらぬ。ショーペンハワーは自家撞着の好模範である。

四　人生義の諸説

我等の中一人として死を欲する者はない、誰れも永久に生きてゐたいと思ふ。茲に一物ありとせよ、其ある以上は必ずある理由又は意義がなくてはならぬ。存在の理由（原因と混同する勿れ）は即ち存在の目的だ。古來幾多の悲觀哲學者現はれしに拘らず、人生は有目的として今日まで繼續された。そは歴史的事實であつて、拒絶する能はぬ。併し生存目的の内容は、人智の發達と共に種々の變化を經歴し、幾多の倫理説となつて現はれた。快樂説、幸福説、名譽説、功業説、藝術説、道義説、本能説、功利説、自我説、愛他説、人格的理想説、未來説等枚擧に遑あらぬほどだが、主なるものは畧ぼ上述の如き諸説である。今一々其長短を論述する繁雜を避け、茲には凡てに共通なる點のみを指摘した

いと思ふ、そは共通の點即ち人生の目的の眞の要素なるべきが故である。

先づ第一、此等の諸説は其極致に於て、凡て精神的であつて、物質的でないことだ。快樂説と幸福説とは畧ぼ同樣で、前者は後者より聊か瞬間的、肉體的であるやうだが、快樂派の開祖エピキユラスは劈頭第一に喝破した。曰く、肉體的快樂は只瞬間の快樂にして眞の快樂にはあらず、眞の快樂は永續不變的な精神の快樂なりと。本能説でも肉欲滿足をば眞の本能説なる如く吹聽するは淺薄な見解で、其代表者としてかつがれし大哲ニイチエは肉欲論者ではなく、『越人』を理想とした君子人で、『越人』は即ち彼れの所謂本能主義の目的物である。人には肉欲的本能以外に美的（藝術的）本能あり、道義的本能あり、宗教的本能がある。これ等の本能の内、最も吾人に恒久なる高尚なる滿足を與ふる本能は、やはりニイチエの所謂『越人』たらんと欲する本能の如く、道德的、否寧ろ宗教

的即ち精神的本能の滿足である。功利論者とても物質文明の發達のみを目的とする者ではなく、詮じ來れば、精神文明の方が功利の目的にも叶ふと云ふ點からして、料理屋や球突場よりも、書店や學校の盛大を喜ぶと云ふことに歸着する。見よ物質は排他的で、甲者が獲得すれば乙者の損失となる。併し精神的の利得は分てば分つほど增殖する。百萬弗の財を貯へても飽くことを知らぬ人よりは、一錢の金に足ることを知る人は却て富裕なる人である。物質的の富を增殖するよりも精神的の富を增殖する方が遙に近道である、好結果である。功利主義の結論も精神的に終らざるを得ない。

次に來る名譽說や功業說は全然精神的である。昔しアレキサンダーの時代、彼れの軍功赫々たるを羨み、己れ自身も彼れの如く雷名を天下に輝かさんものと、其頃最も宏大なるグリシヤ式の建築として知られし、月神の宮を燒いた馬

鹿者があつた。彼れは精神的な名譽を物質化せんとして失敗した者である。なるほど彼れの名は後世に傳へられた。併しそは馬鹿者の標本としてゞある。名譽も遂に道德的ならざるを得ない。そは求むるが故に來らずして、却て求めざるが故に來る。又功業說では、多くは精力主義を高調して、活動々々、活動が人生の目的である、何んでも宜いから寸時を惜んで活動せよと云ふ。併し活動は手段で事業の成功が目的である。否、成功其者も實は手段であつて、成功より來る精神の大滿足を得んには、勢ひ恒久に偉大なる事業を完成せねばならぬ。そは一個人の爲にするよりも一家の爲にし、一家の爲よりも一國の爲にし、一國の爲よりも寧ろ全世界の爲にする大事業でなくてはならぬ。假令へば世界の平和の爲に各國を通じて軍備の全廢を企る、度量衡や通貨の均一、自由貿易の確保、國境の廢止、人種的偏見の防遏、社會的自由の伸長、世界語の採用、世

界的宗教の傳播等の爲に活動するが如きで、自己と共に萬衆の幸福、滿足の爲めにする所、そはイエスの敎へし世界的兄弟主義の實行であつて、やはり精神的のものである。

五　自我充足か

藝術說では、人生の目的は他にない、美の好尙に沒入して、美と抱合し、恍惚消魂の境地に逍遙することであると。言葉は誠に美はしくあるが、意識の主體を滅却して美を味ふことは全然不可能で、自意識がなければ從つて美の鑑賞もないのである。所詮は藝術主義も、否定し難き『自我』の精神的滿足に歸着するであらう。又曰く、自然は理想美を發輝してゐない。故に之を征服し、利用し、人工を加へて美の眞髓を發輝せんと、斯くて藝術は生れた。而も美の眞髓

を發輝して、一層完全に、恒久に美的欲求を滿足させ得るものは建築よりも彫刻、彫刻よりも繪畫、繪畫よりも音樂、音樂より詩歌といふやうに、最も物質的、肉感的のものから、段々無形的、精神的のものに進み往く所、藝術宗の目的もやはり、客觀的に藝術其者の內に自我を失ふことにあらずして、主觀的に藝術の內に恒久の自我を見出さんとする、精神的の滿足に外ならぬのである。

道義說は勿論精神的で、吾等は報酬の爲に道義を行ふでなく、道義其者の爲に之を行ふ、道義即ち人生の目的であると。而も吾等が道義を行ふや、道義自身が目的ではなく、必ず或る種の効果を期待してゐる、否、効果あるが故に、そは德行となる譯で、無効果なる德行は不成立である。假令へば他人に滿足を與へんとか、社會の福祉を增進せんとか、或は德行により自己に滿足を來たすとか、目的は德義其者以外にあつて、必ずや自我か他我かの精神的滿足を最終の

目的としてゐるのだと解釋されうる。然らば自我の滿足、若くは他我の滿足が眞の人生の目的なるやと問へば、自我說及愛他說の二說に分るやうだが、結局はこれも同一である。自我の滿足を主張する者は、萬衆を犧牲に供してまでも自我の滿足を求めよと云ふかも知れぬが、そは全然物質的にのみ可能で、精神的には他を排斥すれば排斥するほど自我の滿足が削られて往くではないか。世界が我れ獨りの世界であつたならば、物質的のみでなく、精神的にも思ふ存分自我の滿足が出來るかも知れぬが、如何せん、地球丸の乘客だけでも概略十六億と稱せられる。自我のみの滿足は絕對に不可能である。之に反して自我の貴重なる所以を知る者は、知る者ほど、他人の內にある自我を尊重せざるを得ざるべく、自我の尊重は畢竟他人の價値を尊重する所以となる。斯くて結局、自我說も一種の愛他說に歸し、自己を沒却して他の爲に生きよと云ふ愛他說も實は

一種の自我說となる。他を愛する、他の爲にするといつても、愛せられる受動的の他のみありて、愛する自動的の自己がなければ、愛他は實に無意味である。愛する自己ありて初めて愛することが出來るので、自我は愛他の必然的條件ではないか。

六　精神生活の充實か

之を要するに、上述諸說の主張する人生の目的は、一般に精神的（肉感的に對して云ふ）の滿足、即ちスピリチユアル　サチスフアクションであることは慥である。併し何の爲に精神の滿足が左樣に必要であるか。若し肉體と精神と其高低尊卑相擇ぶ處なしとすれば、吾等は肉欲の滿足を目的とする物質論者や自然主義者の行道を見て、敢て嘲笑することは出來ぬ。そは物質的なると精神

的なるとを問はず、若し滿足それ自身が目的であつたならば、滿足の獲得と共に、人生の用は絶えて跡なき死灰一沫、如何にも物凄い心地せざるを得ない。茲に於てか、理想的人格主義者は揚言して曰く、人生の價値は精神的滿足と云ふが如き或者を得んとするのでもなく、亦或事を成就せんとするのでもなく、只或る者たらんとする目的に於て存すと。英語の所謂ッー　ハヴに非らず、またッー　ヅーに非らず、即ちッー　ビーである。然り、人格の養成が人生最大の目的であると。

世界廣しと雖も、我れと同一の性格を備へたものは他に一人もあり能はぬ。我は即ち我れにして、二人あり能はぬ。我れの價値は無限にして、我が品性の修養とは即ち我れの價値を發輝するの謂ひである。我は我が品性を磨かんことを欲するやうに、我が隣人も然か思ふ。彼れが品性の修養は即ち我が品性の完

成に直接の關係を有する。そは我等は人間相互の社會的交渉によりて、最も好く品性を練磨し得るからである。然らば品性とは何ぞ、私は茲に其定義を與へない。定義は屢々意味を限界狹少にする恐れがあるから、詩的解釋を以て、それは性格の『匂ひ』だと云つて置きたい。道行く馬に蹂みしだかれし野邊の白薔薇、しほらしくも咲き出でたる黄昏れ時、音なき風に誘はれて馥郁たる芳香、ふわりと匂ふ我が袖に、振り返りては手折りもやせんと、思はしむる一莖の野花、そは誠に這般の消息を傳へ得て妙なるものではないか。我れ今美人を見た。彼女は誠に美はしく、床かしく、懐かしく思はる。そは何故なるや、私は先づ彼女の口許を見た、左程でもない、目元を視た、左程でもない、顔の形や、鼻の格好、擧止動作の細々に至るまで熟視したが、別に取り立つて云ふほどのこともないが、さて何んだか美はしく懐かしく思はる、これ即ち彼女が容色の然

らしむる所に非らずして、心靈のチアームである、人格の匂ひである。嗚呼慕はしさは此匂ひなる哉。

吾等は如何にもして此匂ひを吾身に實現したいと思ふ。そは言行動作の結果として來るのではなく、吾が全人の奥底より湧き出づる或物である。吾等が靈妙な精神は悉く外界に表顯される能はぬ、そは表顯さるべく餘りに偉大である。併し其幾分は常に外界に表はれてゐる、そは恰も朦朧として影の如く、一種云ふべからざる人格の匂ひとして個々の身邊に付き纏ふ。されば、高貴なる人格とは必ずしも偉大なる事業を成就せし者でもなく、雄渾なる思想を世に發表した人でもない。そは内なる精神の修養を完成した人である。否、完成をこれ務めつゝある人である。其著しき特徴は愛と信仰の形を以て外界に現はれる。愛と信仰とはげに人格修養の二大要件である。斯くて吾等は職業の如何に拘らず

事業の成敗如何に拘らず、學識の有無、才智の高下、貴賤貧富の分ちなく、何物にも換へ難き高貴の人格を鍛ふて以て、人生の目的を達し得たりとなす。我等は街路の掃除人であつても構はない、炭坑の穴堀りであつても宜敷い、肥桶擔ぎであつても差支へない。が、世のあらゆる罪惡や肉の誘惑に打ち勝ち、潔白なる聖淨なる人道の勇士として己れを愛する如く、他を愛し得るに至りし時、吾は從來の吾に非らずして宇宙を抱擁する處の我であらう。宇宙の休戚は我の休戚にして、我れの發展は宇宙の發展ならん。我が人格は即ち宇宙大である。斯くて吾はいと小さき吾れにして、同時に最も大なる我れである、故ある哉、イエスは人の子にして亦神の子と稱せられしことや。

七　理想的人格主義

吾等は人格の貴き所以を聊か知つたと思ふ。そは世の富の如く遂に朽ち果つべきものではない、世の事業の如く遂に我れより離れ去るものでもない。そは永久に朽ち果て難きものなるのみならず、我れと共に成長し、我れと最も密接の關係を有し、我れと寸時も相離る可からざるものである。人格即ち我れである、我れの全部である。茲に於てか、未來主義の人生說は當然の論結として、理想的人格主義の壘壁となつてゐる。今や問題は、我れと他の我れ、即ち我れと人々との關係に非らずして、我れと宇宙の絕對者との關係である。我れ何者ぞ、我れの未來や如何？

罪惡の重荷に苦んで、之に打勝つ勇氣のない人達は汎神論者と共に無我の未來を想像し、吾等の死後は人格も品性もあつたものでない、罪も德も、惡も善も、一如法海の水の泡、何等の個性をも止めざらんことを希望するであらう。

之に反して、未來主義者は曰く、吾等が赫々の生活は現在にあらずして、未來にありと。然り、吾等の個性は永久に朽ちじ、そは永久に完全に向つて上進するのみならん。自からを卑しみ、自から殺す者に永生の望みはない。絕え間なき向上の努力、精神の修養、理想の憧憬、眞善美の追求、あゝそは久遠の光を望む人々の日常の糧ならずして何であらう。吾等は「天にまします父の完きが如く完からん」ことを希望し、努力する。時間や空間は最早問題ではない、肉體の存亡は最早重大事ではない。恒久無限なる靈性の活現、そは誠に限りなき人格の完成を意味するものにして、人生最終の目的は實に茲に存するのである。

囚はれたる日本

一　誤れる教育主義

囚はれたる哉日本國民！　彼れ一たび母體の桎梏を離れて、孤々の叫聲を此世に擧ぐるや、襁褓直に彼の身邊に纏はりて自由の行動を奪ひ、間もなく子守女の背中に囚はれては、翡翠口頭の蛙よりも憐れに、彼は泣き、彼は叫ぶ。而も子は泣く者よと心得たる養育者は彼が啼泣の如何に不自然なるかを覺らず、又そが生兒の健康上如何に有害なるかを知らざるものゝ如く、胸部を壓迫し、兩肢を束縛し、人間本然の發育を妨げて、態々不具の子を造る。稍長じて、幸ひにも子守女の虐待を脱し、歩行の自由を獲得するや、彼は再び行儀作法の形

式に囚はれ、膝を折り、踝を抂げ、座踞の惡習を慣ふて以て、益々不自然なる曲背短脚の怪物となり、後天的の畸形兒に化す。而も習慣の力は遂に天性を抂げ、彼等は短軀矮小の國民として自ら相容るし、人工的に然か作爲せし虚僞の產物なるを覺えないのである。恰も刈込んだ庭園の造り松、猫額ほどの築山泉水の如く。萬事アブノオマル（畸形）を尙ぶ日本は、其國民の體育にまで、自然に戻り正順を破り、喬木の枝を撓めて態々灌木たらしむるの愚を演ずるのではないか。

嗚呼囚はれたる哉日本！　今之を其精神界に見んか、事態一層容易ならざるを覺ゆるのである。先づ試に小學讀本第五の卷頭を見よ。日本の太陽神話に現はれたる人物に對して敬稱尊語至らざるなし。八歳の兒童の言語として言ひ廻はし惡しかるべきにも頓着せず、教育者は斯の如き特別語を使用して、兒童の

自然的發育を阻害するのではないか。二千四百年の昔、グリシヤ思想界の先覺は既に迷信の時代を脱却し、日夜民衆の禮拜を捧ぐる太陽の神アポロンは男神にあらずして火の盤なり、又月神アーテミスは女神にあらずして石塊なりと喝破した。言ソクラテスの口より出たのではなかつたが、事誤つて彼が死刑の罪狀に數へられ、彼は國民固有の思想に反し、青年の信仰を攪亂する國賊なりと斷ぜられ、毒杯の刑を甘受して、潔よく此世を去つたのである。二千數百年後の今、哲學進み科學開けし文明の世に、日本は獨り、既に失はれたる神話の宗教的價値を恢復せんと企て、神社佛閣の偶像崇拜を奬勵して、再びソクラテスの毒杯を要求せんとするのであるか。其幼稚なる爲政者の愚亦及ぶべからずである。

更に進んで彼等が家庭、學校、社會に於てする道德教育の情態を見よ。彼等

は徒に繁瑣なる行爲の方則を與へて、其一般的精神を傳へず。爲めに兒童の任意的活動の範圍は削減され、良心の發達自由なるを得ず、只機械的に服從をこれ事とするのである。而もこれら行爲の法則たるや、多くは『勿れ主義』の產物であつて、毫も積極的に善行の勇士たらしめんことを奬勵するものではない。只惡行に臆病ならしめやうとする消極的劣策に過ぎぬ。其偶ま積極的に勇猛心を振ひ起させようとする時は、日常の行爲と何の係はりもない『一旦緩急あらば』式に、反人道的戰爭を鼓吹するやうな場合に外ならぬ。斯の如くにして教育者は、猫の如く豚の如く、怡々として隨從する國民を養成し、以て得たりとするのであるか。それは國家至上主義の爲めには聊か得たものであるかも知れぬが、作られた國民こそよい迷惑、彼等は自主獨立の人格ではなく、只國家の奴隷である、道具である。彼等の良心は他人のものであつて、自家獨特の見解を持た

ず、獨創の判斷を持たず、只外界の指導を俟つて聊か蠢動し得る傀儡のみ、藁人形のみ！　千篇一律無味單調の動物と化して、何の進歩があらう、何の偉業があらう。天才の教育は遂に彼等のものではないのである。

二　個性の蹂躪と國家の奴隷

試に歐米の教育主義を見よ。嘗ては善良なる市民の養成、賢母良妻の育成を以て教育の第一義と叫びし者が少くはなかつたが、今や漸く其非を悟り、否なそが教育の理想として未だ不充分なるを覺り、教育者は大聲叱呼して曰く、我等は善良の市民たる前、先づ善民の人格であらねばならぬ。賢母良妻たる前、先づ賢良の婦人であらねばならぬ。吾等既に善良の男子たり女子たるを得たならば、市民たり妻母たるの道は當然之に伴ふものである。然らば先づ吾等をし

て自主獨行の人格たらしめよ。個々の天性に包蓄されたる才幹器量を發輝し、先づ吾等をして品性（キヤラクタア）の人たらしめよ。國家の盛運、社會の進歩は一にそれ個々の一員が各自獨特の天分を發揮することに於て之を見るべく、個性の發展を阻害する所、社會の進運立ろに休止するであらうと。斯くて彼等は政治と教育の分立を認め、教育機關の運轉に關する財政上の問題の外、政府は務めて教育に關與することなく、官學の弊を恐れて、學問や教育の獨立を期待してゐるのである。

美の本領は調和（ハアモニイ）にある。調和は素と多樣の内に存する一致の謂ひであつて、千篇一律單調單樣のものが如何に配合されるとも、何等調和の美點を形成することは出來ない。教育の事も蓋し同樣であらう。日本政府は繁瑣なる教育主義の萬態を盡して、一個の典型に入れた國民を養成し、一に傀儡の如き賢母良妻

を作製せんとしてゐる。全國劃一主義の國定教科書を用ひて、各の兒童に不變劃一の精神的糧食を與ふ。斯樣な教育法で以て、どうして趣味の豐富な、智識の多樣な、思想の獨創力に富んだ人物を養成することが出來よう？　作られた國民は前後左右に自分と酷似した同一模型の人物を見、單調無味の生活に飽き果て、同性反撥の心理作用に動されては、意氣ある者こそ却て埒外に飛び出して自由を叫び、自我を主張する。而も彼等不幸にして道德の原理原則を學ばず、只日本主義的典型の內にある間のみ通用するやうな行爲の細則を學んでゐた者なるが故に、よし一旦埒外に放逸して、世界的自由を叫び、宇宙的無限の大氣に嘯くとも、自主獨立の氣象あるなく、近隣に對する道義のみかは、自己に對する義務さへ知らず、如何に思考し、如何に行道すべきや、一定の主義なく方針なく、漫然只情欲の向ふ所に放縱して、或は淫逸に耽り、或は邪惡に感染し、

稱する。噫、これ由來何人の罪　あっうか。

餘りに峻嚴なる家庭　杓子定規の行はれる所、因循姑息、優柔不斷の卑劣漢か或は放蕩淫逸のづぼら息子を產出するの外、絕て熱烈なる人道の勇士、獨創的知見を開拓する時代の先覺を養成することは出來ないのである。日本の教育者は今正に寬政天保の舊式に泥づみ、杓子定規を以て彼等の子弟を規律（rule down）し去らんとするのではないか。外來の束縛に束縛を重ねて、國民の元氣を沮喪しつゝあるのではないか。見よ、彼等が度しえないほど精力旺盛、天惠豐富なる有爲の青年は却て放蕩淫樂に耽り、英氣を消耗し、天命を害ひ、又彼等の度し能ふ一部の青年は卽ち依々として大に事へるけれど、これ等は畢竟無氣力病弱の卑屈漢のみで、人生の向上に何の爲す所があらう。誠に浩嘆の至りに堪へないのである。

を作製せんとしてゐる。全國劃一主義の國定教科書を用ひて、各の兒童に不變劃一の精神的糧食を與ふ。斯樣な教育法で以て、どうして趣味の豐富な、智識の多樣な、思想の獨創力に富んだ人物を養成することが出來よう？　作られた國民は前後左右に自分と酷似した同一模型の人物を見、單調無味の生活に飽き果て、同性反撥の心理作用に動されては、意氣ある者こそ却て埒外に飛び出して自由を叫び、自我を主張する。而も彼等不幸にして道德の原理原則を學ばず、只日本主義的典型の內にある間のみ通用するやうな行爲の細則を學んでゐた者なるが故に、よし一旦埒外に放逸して、世界的自由を叫び、宇宙的無限の大氣に嘯くとも、自主獨立の氣象あるなく、近隣に對する道義のみかは、自己に對する義務さへ知らず、如何に思考し、如何に行道すべきや、一定の主義なく方針なく、漫然只情欲の向ふ所に放縱して、或は淫逸に耽り、或は邪惡に感染し、

無意義、無理想の生涯を送りて以て自然主義者と稱し、美的生活の實行者と僭稱する。噫、これ由來何人の罪　あっうか。

餘りに峻嚴なる家庭　杓子定規の行はれる所、因循姑息、優柔不斷の卑劣漢か或は放蕩淫逸のづぼら息子を產出するの外、絕て熱烈なる人道の勇士、獨創的知見を開拓する時代の先覺を養成することは出來ないのである。日本の教育者は今正に寬政天保の舊式に泥づみ、杓子定規を以て彼等の子弟を規律（rule down）し去らんとするのではないか。外來の束縛に束縛を重ねて、國民の元氣を沮喪しつゝあるのではないか。見よ、彼等が度しえないほど精力旺盛、天惠豐富なる有爲の青年は却て放蕩淫樂に耽り、英氣を消耗し、天命を害ひ、又彼等の度し能ふ一部の青年は卽ち依々として大に事へるけれど、これ等は畢竟無氣力病弱の卑屈漢のみで、人生の向上に何の爲す所があらう。誠に浩嘆の至りに堪へないのである。

三　民族主義の失敗と自殺的日本主義

顧つて思ふ、我が國民が海外に移住し始めてから未だ幾何もならずして、至る所に思想や感情の衝突を見、非文明低道德の國民として非難を受け、殊に對岸の米國加州に於ては土地の所有權さへ褫奪されたりしてゐるのは、由來何が故であらうか。彼等は自國民ありて他國民あるを知らず、自家の利害に目鋭くして他國人の利害を顧みず、虛榮心のみ强くして共同の精神を缺き、公德を重せず、社交を閑せにして只私利のみに汲々たり。これ狹隘なる忠君愛國主義を鼓吹した明治教育の中毒ではあるまいか。世界的博愛主義を原理とする精神教育の素養を欠如せるが爲めではあるまいか。米國に於ける排日熱は畢竟國家

至上主義、我利的民族主義の禍ひする所であつて、亦自から招いた身の錆に外ならぬ。

噫、囚はれたる日本！　座癖に囚はれて短軀曲脚の畸形兒となり、彼女は更に精神的にも一層誤れる日本主義の桎梏に繫がれて、一層不自然なる畸形兒となつてゐる。自然科學の日本に輸入されて以來、其進歩稍々見るべきものありしに拘らず、精神科學の進歩頗る遲々たる有樣は何故であらうか。吾等は斷言して云ふ、これ日本主義の禍する所であると。彼等が自然科學を學ぶには、重力の原則や槓杆の原理に日本的例外を設くる必要を見ず、理性の向ふ所、自由討究を阻害されることがないから、科學の發展は頗る急速であるけれども、精神科學（社會科學）即ち法政、倫理、哲學、宗教の學に至りては、事々に日本的例外を設けて、自由思想を許さず、曰く、『そはよい世界思想であつても、我が

日本は特別の國柄だから、日本の現在に適用することは出來ぬ』と逃げてしまう。(先年『太陽』に連載された上杉對美濃部博士の日本憲法上の爭議を見よ。)甚しきに至りては、國法の哲學的研究をなす最高學府の教授にして、勅語の絶對的權威を稱へて、其道德的價値如何に拘らず、單なる勅語といふ名目を以て、そは無上の權威を構成すと主張し、之を道德上から苟且にも批判的に評價することを許さぬと云ふに至りては、阿諛か癲狂か吾等其類屬する所を知るに苦むのである。斯の如く彼等は非合理にも『國家』なる權威を以て子弟に蒞み、爲めに青年の研究心は頓挫し、なるべく後生大事に先輩の指導を服膺して、傳統に隨從し、哲理原則の自由討究を避けんとするに至つたのである。斯くて精神科學は何等の進步なく、よし進步あるも實際に應用されることなく、偶々以て日本主義、國家主義の辯護に供せられるのみ。噫、囚はれたる哉。

見よ、先年某帝大の一教授が北國に講演に往つて、言聊か過激に亘れりと自から覺るや、退壇直に車を馳せて其地の新聞社に至り、低頭平身、彼れの口演を公表せざらんことを希ふたと。何ぞそれ卑屈なるや。自信を發表するに憚るなき、これ學者の態度ではないか。聊か政府の忌憚を怖れて、自說の取消を哀求するやうな有樣で、男子の本領が何處にある？　而も翻て思ふ、最高の學府に教鞭を取る堂々たる一個の學者をして、事茲に出でしめしもの、實は爲政者の輩權力を濫用して、言論の自由を束縛するが故ではないか。今の大隈內閣などは餘程此弊を矯正したやうであるが、一般の社會は未だ官尊民卑の惡風を脫せず、上は權力を以て下に蒞み、少しく新思想を皷吹する者あれば、直に以て社會主義者となし、或は露探だの獨探だのと汚名を冠して、角袖を後から微行させると云ふことである。斯の如くにして、百千の學者は笞杖の凌辱を恐れ、

口をつぐみて言はず、否な却て權門に阿ねり、傳統に迎合し、巨多の例外を設けて却て日本の特色として誇り、怡々太平樂を謳はんとするものゝやうである。乃木大將の殉死の當時の如き、吾等はどれだけ阿諛的な讃辭を聞いたか分らぬ。門司驛員の自殺に就いて山川健次郎氏反對の意見を發表するや、社會は一般に非難の聲を擧げ、遂に彼をして大學總長の職を擲つべく進退伺を出さしめたではないか。其後某縣下の一校長、校舍の火災に際し、炎々たる火中に飛び込んで、御眞影の爲に殉死を遂げたと云ふことである。彼が忠烈の死は恐らく乃木大將のそれにも優さりて讃美すべきであらう。されど思へ彼が誠忠の觀念は眼識の狹小より來る過誤ならずと云ふことは出來ぬ。若し彼にして、彼に心靈の啓發を托せる幾百の兒童に對する責任の重且つ大なるを思ひ、彼が百年の生命を生き永らへて努力奮鬪するも尙其萬一だに盡し能はざるを知りたらんには、

彼れ盡んぞ斯る輕擧を敢てして、彼が報國の大責任を蹂躙するやうなことがあり得よう。然り、彼れも亦囚はれてゐたのである。

四　世界的日本の大理想

嗚呼囚はれたる哉日本！　此の如き國民は常に過去に生き、現在を知らず、何等未來の大希望あるなく、大憧憬あるなし。而して大憧憬なき國民には大宗教なく、大宗教なき國民には大詩人なく、大詩人なき國民には大理想なく、大理想なき國民は即ち死んだ國民である、囚はれた國民である。

アジア東端の巨島國、太平の浪萬里同風を稱へて、富岳千載の雪を誇つてゐるが、國民は尙舊思想の奴隷であつて、死息唵々。願くば吾等をして滔々流れ往く世界文明の思潮に掉し、宇宙創造的進化の渦中に投じ、微の生えた狹い日

本主義や、國粹保存主義の文化を捨て、劃一主義や箱詰主義の教育を棄て、貴族主義や官僚主義の政治を棄て、民族主義や軍國主義の外交を捨て、自由と平等と友愛の精神を以て新らしき世界的日本の大文明を打建て得んことを。日本は世界の爲めに存在するとも、世界は日本の爲めに存在するものではない。世界をドイツ化せんとするドイツ人の態度が誤つてゐるやうに、世界を日本化せんとするは間違ひである。願くば吾等をして經濟に政治に教育に宗教に、思想と良心の自由解放を叫び、日本を世界化せんとする世界的大理想の大文明を建設するに努めしめよ。

人生の向上と努力

人生は進化である、生長である。眼が後頭部になくして顏面にあるは前進の燈臺たらんが爲めなりとエマソンは云つてゐる。若し人生にして進步なく發展なくんば、無意義の死物と何の擇ぶ處があらう！　然らば如何にして人生の進化を遂ぐることが出來るか、これ吾等の知らんと欲する處である。

吾等は實に不可思議の力を吾等の內に蓄へてゐる。そは只力であつて如何樣にも使用することが出來る。善にも惡にも、太く短く、狹く長く、或は有益に或は無益に如何樣にも使ふことが出來る。催眠術などの力により精神が集中して働く時には、普通の場合に見ることの出來ない物でも透視することが出來る。

他の心に考へてゐる事でも其外貌によつて判斷することが出來る。吾等が通常注意の働きにより認識し得る外界の事物は甚だ少くある。然るに注意の外に逸し去つた澤山の事物が我等の心裡に印象されてゐて、折に觸れ機に乘じて意識の上に昇り來るは心理學者の既に確認せる處である。

藤田靈齋の著書にある如く、吾等の肺は幾萬かの氣吼を有してゐるが、實際日々使はれてゐる部分は只僅に其一部に過ぎぬと云ふことである。彼れの呼吸法の要諦は實に玆にあるので、其空しく使用されざる氣吼を深呼吸の力により働かしめたならば、どれだけ人體の血液を增殖し淸鮮にすることが出來るか分らんと。ウイリヤム　ゼエムスは同樣なことを心理作用の方面で云つてゐる。即ち吾等が日々の行動に於て吾等は內なる精神力の只小部分しか使用してゐない（"More life isin our total soul thanat any time we are aware of."）。若し此精

神力の凡てを自由に活用することが出來たならば、吾等は如何ほど大なる事業を成し遂げ得るか分らんと。

然らば如何にして此精神力の凡てを活用することが出來るか、これにはやはり靈齋の呼吸法的修養が必要である。催眠術により普通以上の心的活動が出來るのは精神集中の一點にあるやうに、吾等は意志と情熱の力を以て精神を集中して事に當らねばならぬ。昔アーキメデスは數學の問題に考へ込んで、我家の兵火に包まれ居ることさへ知らなかつたと。ドイツの歷史家モンゼンは道で逢ふた吾子の顏をも見知らなかつたと云ふが如きは、往々天才者の間に見る處で、天才と凡才との差異はたゞ精神集中の力にありと云つても不可なきくらゐである。即ち天才者は其ある限りの力を一方に傾注して、一徹に其理想を貫かんと奮鬪する者に外ならぬ。

ダヴヒド　ジョオダン博士曰く、大學教育は學生自身の才能の向ふ所を知らしめ、之を畢生の事業に傾注させんが爲なりと。教育の要は精神力の經濟的活用法を知らしめ、凡才をして天才的事業を成さしめんが爲である。大火を消さんとするに少しづゝの水を其處此處から撒きかけても全然駄目であるが、消防夫がするやうに、これ等の水流を集中して一局部に傾注すれば、容易に鎮火し得ると同樣、人間の精神力も一事業に集中しなければ何の効果なく、只無益に消費するのみである。

吾等の精神は無生物とは違ひ、使へば使ふだけ減少するものではなく、却て增殖發達するのである。マタイ傳廿五章にある銀貨の譬諭は蓋し此邊の消息をよく傳へたものであらう。五千銀を預りし僕は之を活用し增殖して一萬銀を主人に返へした。然るに千銀を預りし僕は元金の失せざらんことを恐れて、地中

に之を埋沒してゐたと。不幸にも世には後者の仲間に屬する者甚だ多く、內なる精神力を發揮せず、琢磨せず、品性の修養を怠れること恰も守錢奴が金を集めて無益に地中に埋沒せるが如く懶惰に、奮鬪せず活躍せず、只怡々として生き、只ぐづ〳〵して無意味に世を渡る、誠に遺憾千萬ではないか。

『それある者は與へられて尙餘りあり、なき者は其ある物をも奪はれるなり』と。吾等が愛や同情や悅樂や祝福や、分てば分つほど增殖するも、之を分たずして自我の穴倉に詰込み、他と共に分有する心掛けなき者は既に其持てる物さへ何の要をなさず、無益に朽去ること恰も奪去られると同樣である。パラミシウムと云ふ顯微鏡的小虫が老ひて死に瀕するや、他の一虫と抱合して二個一體と化し、再び若か返りて分殖作用を起す。下は此の如き原生動物より、上は人間の精神作用に至るまで、凡てそれ生命は他と分有し共同して進化發達する。

個我の爲めにする精神力は個我と共に滅び、他の爲め人類の爲め宇宙の爲に活用し協力する精神は、人類の存する限り宇宙の存する限り、永久無限に向上して止まぬ。斯くて人生は限りなき發展である、限りなき向上である。

自然生活と精神生活

自然生活卽ち動物的生活は自己の感覺(センス)の及ぶ限りを自己の生命として生くる生活である。例へば一疋の犬が他の犬の殺されるを見ても左程痛痒を感じない、勿論全然感じないのではないが、彼自身の臀部に一鞭を加へられたほどにも感じない。同棲せる他の犬が奪去られた時でも、一時は愁傷せるやうであるが、速に忘れてしまふ。牛馬の生活は喰いたいだけ喰い、飲みたいだけ飲んで、眠い時には眠る。人に使役されれば依々として從ふ。別に努力もない奮鬪もない、呑氣な生活である。何の苦勞もない、何の憂愁もない、從て別にさしたる幸福もない、喜悅もない、只悠々自若として生くるのみ。彼等には元來罪の感じがない、責任の感じかない。從て德義善行の觀念もない。何等の憧憬なき希望な

き無道德（ナンモラル）の生涯卽ち自然的の生涯を送る。そは憐むべしとも、羨むべしとも云ひ難き、意味淺い生涯である。

人間の仲間にも自然主義なるものを稱ふる人がある。彼等は外でもない、人間的生活は努力奮鬪を要するが故に、呑氣な動物的の自然生活に歸れと云ふのである。努力奮鬪の生活を虛僞として、動物的本能の活動に隨從するをこれ人間本來の情態なりと云ふ、誠にお目出度い說である。

彼等の云ふ如く、人間は動物の進化したのかも知れぬ。或は動物の如き徑路を通つて發達し來つた特別の生物であるかも知れぬ。そは兎に角今日に於ては動物と人類とは全然別種の生物である。其差異は啻に程度の差のみでなく、ベヤグソンの云ふ如く性質上の差である。然らば其差點は主として何れにありや。私は今其肉體的方面を別として、玆には心的方面の只一班を述べたいのである。

一言にて掩へば、人間には動物に於けるが如く、自然的本能生活の可能もあるが、同時に靈的精神生活の可能或は要求がある。これそが動物と全然其種を異にせる所以である。

精神生活とは何ぞや。オイケンなどは哲學的にむづかしい議論を上下してゐるやうだが、吾等凡俗にはそんな必要はない。常識の見た極く單純な精神生活の釋義で澤山である。然りそは一言を以て盡し得るほど單純な思想である。但し實行においては絕大の努力を要する。卽ち吾等の所謂精神生活とは、自己の感覺（センス）の及ぶ限り以上のものをも自己の生命として生くる生活である。自己の感覺以上のものとは、己が個體以外の生命なる親である、兄弟である、友達である、人類一般である。されば此種の精神生活は其內容如何により大小高下非常の懸隔を生ずる。玆に一人の家を愛する者がある。彼れの同情は自己以外に一家族

の凡てに注がれてゐる。親兄弟妻子の悲喜哀樂は直に彼のものとして感ぜられる。彼は實に一家族的精神生活を營める者である。茲に國を愛すること自己を愛するが如き人がある。彼は戰場に立つて討死した。自然生活の眼を以てすれば、彼の生涯は失敗である。されど彼は肉的個體のみを自己の生命として生きてはゐなかつた。彼は國家を以て彼の眞生命とし、國家の休戚を直に自己の休戚とした。彼は自己の靈的生命を尊重して其安全を圖らんが爲に、遂に個我の肉的生命を犧牲に供した。而して同時に彼は家族的精神生活を一層宏大なる國家的精神生活の犧牲としたのである。小を殺して大を生かす、これ精神生活に努力奮鬪の必要なる所以である。

今若し彼が同情の範圍を一層擴張して、世界人類凡てに及ぼし、全人類の罪惡苦難をば眞に自分が苦戰奮鬪して撲滅を期する罪惡苦難なりとし、全人類の

福祉、向上をば自己の追求する福祉、向上としたならば、彼は實に世界大の精神生活を營める者である。尙之を無限の宇宙に押擴げ、無窮の時劫に於ける世界全人類の運命の爲に日夜畫策奮鬪する人々は、げに宇宙の發展と向上を常に畫策し扶助し給ふ神と其目的を同うし、神の心を以て彼れの心とせる、即ち神人合一の精神生活を味へる人道の勇士である。イエスの所謂神の子である。

斯くて彼は自己を失つたのではない。又家族を失はず、國家を失はず、彼れの精神生活中にはこれ等凡ての要素が秩序整然として躍動してゐる。只大なる生命に大なる地位を與へ、小なる生命に小なる地位を與へるの差あるのみで、最小なる個我の愛だも滅却されてゐない。小を殺して大を生かすは必ずしも難事ではない。併し小を生かして尙大をして一層大なる生命たらしむる、これ精神生活の要諦である、屈竟の努力である。斯る精神生活は自我充足（セルフフラチフヒケエション）の生涯

ではない、但し自我滅却の生活でもない。そは自尊自重の上に立つ自己本懷（セルフサチスファクション）の生活であつて、同時に神的清淨、圓融無碍の生涯である。

人生と冒險

人生は賭博ではない、投機ではない。併しそは大なる冒險事業である。吾等は眞理の爲め生命を賭して戰はねばならぬ。吾等は善美の理想の爲め日夜寢食を忘れて奮鬪せねばならぬ。所詮人生は一種の冒險である。

吾等は絶對の眞理を求むるも、其有無すら早や疑はれてゐる。今日宇宙の創造的進化を信ずる人は眞理にさへ一定不動のものあるを是認することは出來ぬ。從て眞理とても生命の發展に伴ふて進化生長極りなきものであらねばならぬ。されば今道德の標準を求めて絶對のものを攫（つか）まんとするも、初めより確定不動の善惡はあり得ない。單に『詐る勿れ、殺す勿れ』と云ふも、其意義內容は時々刻々に變遷し往く。假令そは神言の銘を打つて社會が吾等に强ゆる所なるも、

絶對的に『詐る勿れ』を嚴守することは出來ぬ。今暴行者の追跡を避けて逃げ込んだ人が吾に隱匿を請ひし時、吾は追跡者を詐りて彼を庇護する、これ果して不道德なりや。若し不道德ならずとせば『詐る勿れ』の箴言は絶對的な道德の標準ではない。『殺す勿れ』の格言も同樣で、若し之を絶對的に解すれば、正當防衛の下にする殺傷も罪惡である、國家が死刑を科するも罪惡である。

そは兎も角も眞の道義は外律的(ヘテロノマス)(格言、律法)のものではない、內律的(オウトノマス)のものである。從て自我生活の發展と共に外律的に社會が持ち傳へた道義の標準は其意義內容を複雜に豐富に變化し往くものである。斯くて吾等が日々の行爲の定規にすら絶對的のものは無くなり、萬事は不安と疑惑の內に包まれてしまう。我等は何處に往くのであるか、又如何なる航路を取るべきであるか、頗る迷はざるを得ない。若し我等の航路が宇宙の太初から一定不動のものであつたなら

ば、吾等は此千載不磨の眞理を攫めば安んじて航海が出來るのであるが、最早吾等は斯る眞理の存在を信ずることは出來ぬ。昔は社會生活が產み出し、人類の經驗が築き上げた行爲の法則を神の啓示と祭り上げ、其處に絶對の權威を認めてゐたけれど、今や然らず。我等の生涯は一六勝負の如く、豫言し得べき確實のものは何も持たないのである。而も吾等は悲觀せず、否却て之が爲に人生の妙味を感じ、彌益人生の向上、人格の發展、社會の進運と福祉とを求めて躍動するのである。

もし人生の行路が一定して居つたならば、吾等の生涯は一個の機械である、傀儡である。時計の針の如く、右すべき者は右し、左すべきものは左す。而も斯の如き機械的、外律的、運命的、必然的の生涯に何の妙味があらう。吾等は人生の荒海に棹して處定めぬ浮き枕、右に走り左に漂ふも、更に其歸着する所

を知らぬ。若し歸着點があつたならば、それこそ大變、そは宇宙の終極である。萬物の死滅である。吾等は萬事の完成を思ふも、若し吾等が完全の絶頂に達し得るのであつたならば、そこに生命は休止するであらう。

宇宙の萬事は不確定である、未知數である。されど吾等は日々の生活に於て吾等が經驗の到達し能ひし程度に於て、現前刻下是が最高の眞理なりと思ふものを認めて之を信じ、絶對至上の理想標準なりと思ふものを躬行實踐して、自發的な道義生活を送る。斯くて吾等の生涯を回顧する時、又人類の歴史を回憶する時、そこに年々歳々の進化向上發展あるを認めて、轉た人生の無意義なるを思ふ能はず。

人格の完成、人類の幸福も何處まで往けば、又如何にせば充足せられるのであるか、一向不可解であるが、尚耿々たる向上發展の勇氣を阻喪することなく、

己が理想とする處に向つて奮進する。吾等は絶對神の有無を疑ふものなりと雖も、宇宙に大生命、大精神の存するありて、限りなく吾等と共に働き、我等と倶に樂しみ、吾等と共に向上し給ふものなるを信せざる能はぬ。然り、我等の信條は虚僞であるかも知れぬ。幻想であるかも知れぬ、然も吾等は此大生命と呼吸相通ずるものあるを信じて百倍の勇氣を得、彼れの如く圓融無碍の大生命を此小い〳〵己が生命に實現せんことを祈求し且つ努力する。

吾等に世俗の所謂安心もなければ滿足もない。晝夜片時も人生向上の煩悶と爭鬪より免れ去ることは迚も出來ない。或時は己が行ひし罪の苦痛に堪へ兼ねて自殺の刀に伏せんかとも思ひ、又或時は社會組織の欠陥に憤慨して、萬衆を塗炭の苦みより救出さんとする勇猛心に切齒扼腕することもある。自我、然り私は私自身を思ふ毎に『汝何者ぞ』との凄まじい自己批判に悚然たらざるを得な

いのである。我は屢々地獄の底を徘徊して、俄に天上の妙樂に恍惚たるもの、一瀉千里に九天の上、九地の下、極美と極醜と、極善と極惡の兩界を往來して尙人生の定めなきを唱つことはできない。

一層の憧憬、一層の祈求、一層の努力、一層の奮鬪によつて、一層偉大なる人格を養成し、一層健全なる社會を建設せんことを期する。そは無益の希望であるか、無謀の計畫であるか、我れ之を知らず。されど人生は如斯冒險である、腕試めしである。然り、吾等は冒險的に突進する人間的宇宙の創造者である、而して生の妙味も亦實に玆に存するのである。

世界の平和

一　戰爭と社會的自殺

經濟上より見たる戰爭の害毒は賭博の夫れの如く、負けた者は勿論損失し、勝つた者は浪費して遂に何の得る所もない。現下の歐洲大戰爭で第三者の側にある日本と米國とは恰も賭博屋の近傍にある飲食店の如く、一時の繁昌に鼓腹を鳴らしてゐるやうだが、そは畢竟火事場盜棒的に漁夫の利を占むるもので、結局生命財產の浪費より生ずる一般的損失の惡影響を被らぬことは出來ぬ。見よ、日本でも米國でも歐洲戰爭の爲め金儲けするものは少數の富豪のみで、彼等が投機的に得た財產は贅澤を促し、貧者之に慣ふて國は一層貧乏になるばか

りだ。日々幾千萬圓の巨財を浪費し、而も幾百萬の壯丁をして生産事業に參加させぬのみか、却て死生の巷に彷徨させる歐洲の大戰爭は今後幾世紀に亙りて不景氣の種を播いてゐるか分らぬ。彼等の或者は所謂萬骨枯れて一將の功を成し得るだらうが、其大部分は戰亂の犧牲となつて、妻子を路頭に迷はしむる者敢て少しと云ふことは出來ぬ。戰爭の殘虐は勿論のことだが、戰爭に附隨して起る俄かの貧困、又俄かの貧困より來る罪惡の激甚なるは、戰爭の夫れにも勝して遙に酸鼻の極みである。

經濟事情を外にして、社會上道德上に於ける戰爭の害毒は玆に喋々するの要を見ないが、戰爭の好結果は如何にしても其莫大なる犧牲を償ふには足らぬ。只少數の幸運兒が漁夫の利を占むるくらゐで、そが大多數を窮境に陷れる不平等的非平民的非文明的非人道的のものなるは勿論である。見よ、南北戰爭に幾

多有爲の青年を屠殺した米國は、どれだけ十九世紀の文明に貢献しそこなつたか知れぬと識者は哭いてゐる。野蠻極まるドイツは今回の戰爭に其野獸性を遺憾なく發揮し、自分の文化を自分自らの馬蹄に蹂躙しつゝあるではないか。殊に傍杖を喰つた隣國のベルヂウムはカイザアの野心に踏みつぶされて、產業停止し、國運は傾き、其衰退の狀相は聞くだに悲慘の極みである。

戰爭の慘害は百萬卷の書冊を以てするとも云ひ盡すことは出來ぬ。そは誰しも知つてゐる所である。然り、交戰國の大部分は充分此殘害を知りつゝ戰つてゐるのである。然らば何故に戰ふか。蓋し已むを得ざるが故なりと。何故に止むを得ざるか。內は以て賭博的野心の欝勃たるものあるが故なりと云ふも、そはカイザアの如き少數野心家のみで、國民の大多數は掠奪的野心を抱懷する者ではない。彼等は只平和を願ふ。而も愛國心、忠義心なる美名の下に煽動され

て、止むなく矛を採る者多きに居るであらう。されば非戰論者は先づ此内的な戰爭の原因に遡りて、忠君愛國心の抑壓や民族的國家的野心の撲滅と共に、世界主義的博愛心平和心の鼓吹に努めねばならぬ。

二　軍備全廢の主張

然り、戰爭の内的原因が最も有力なるは勿論とするも、其發動の機會を作る外的の事情も等閑に附することは出來ぬ。外的理由の一として最も有力なるは即ち軍備の競爭である。世界的政治組織の欠陥である。絶壁の上に立つ人は往々眞倒に飛び下りて死んで見たらと云ふやうな馬鹿氣た考を起す。これ懸崖が暗示する心理作用である。是と同樣に出刀抱丁を持てる者は何か切〻見たいやうな氣持がする。もし過て喧嘩でも吹掛くる者あらば、此出刀抱丁は直に對敵

の頸筋に飛付くであらう。軍備は常に假設的の敵を想像し、想像上の敵はやがて事實上の敵となる。軍備なかりせば戰爭の起り得ざりし場合擧て數へ盡すことは出來ぬ。護身用のピストルは却て喧嘩爭鬪の原因であつて、無手の人は容易に人と爭はぬものである。されば世界平和の保障として吾等は先づ軍備の全廢を主張せねばならぬ。縮少ではない。縮少は不可能である。そは恰も暴飲家の節酒の如く不可能であるが、全然禁酒なら出來ぬことはない、却て容易である。若し夫れ世界の强國が聯合して兵器の作製を中止し、軍備を全廢し、軍艦を改造して商船となし、兵營を改築して學校を興し、工場を設立したならば、戰爭の可能は忽ちにして全滅するであらう。

見よ、年々全世界を通じて各國國費の三分の一以上、即ち四十五億萬圓の軍事費を費して國防の爲めと僭稱し、人生最大の罪惡を期待するは實に滑稽至極

ではないか。米國の如き平和國にして敢て國境を修めずと誇りながらも、年々歳入の三分の一以上は軍事に費してゐる。近來の如く軍備擴張（プレペヤアドネス）に大騒ぎをやるやうになつては尚更のことである。此の如き大資本を育英、生産の大事業に投じたならば、どれほど積極的に國利民福を增進し得るか分らぬ。實に馬鹿氣切つた惡習だ。然り、戰爭の害毒、軍備の惡弊は誰でも知つてゐる。世界の平和、萬民の和樂は誰しも望む所である。然らば何故に兵備を整頓するやと云ふに、爾かく多大の犧牲を拂ふても尚ほ外寇の恐るべきものあるが爲で、もし戰爭の可能を剿滅せば、左樣な恐怖も自然に消滅する譯で、從て軍備の必要はなくなるのである。されば戰爭の可能を撲滅する外的の條件として吾等は先づ世界聯邦の組織を呼號せねばならぬ。

三　世界聯邦の組織を呼號せよ

〈エグの平和會議は規模餘りに小に過ぐ。宜しく世界各國各人種に檄し、人口と領土に應じて幾人かの代表者を出して世界の大議院を組織し、此議會に於て萬國聯合の規約を調製し、世界大憲法の編輯を了へ、先づ第一に萬國を擧つて軍備の撤廢を實行する、何の難いことがあらう。或者は杞憂して云はん、支那やメキシコのやうな半開國では常に內亂の恐れがあるから、軍備の徹廢は不可能であると。然り、半開國は恐らく最初から世界の聯邦に加盟しないであらう。きれど彼等の去就は決して萬國聯邦の大勢に影響を及ぼすものではない。今日軍備の負擔重く、且つ其弊に堪へぬ國々は却て文明國である、一等國である。彼等は內に泰平を稱へて常に外に向つて侵略的行動を取るが故に、國際戰爭の

動機絶ゆる暇もないのである。されば世界の強國が聯合して軍器の製作を中止し、兵備を撤廢するに至らば、半開弱國の軍備位は雲烟過眼視して可なるのである。げに彼等が國際戰爭を起し得るまで國力充實する間には、彼等の內部から起つた要求で、天下泰平の恰樂を謳へる先進國の聯邦に加盟すべきは火を睹るよりも明かである。恰も北米合衆國が始め十三州の聯邦より次第〳〵に近隣の領地(テリトリー)を糾合して、遂に尨大なる大民主國を形成せる如く、世界の所謂文明國が相結合すれば、世界政治の傾向は夫れで一定の方針を樹立することが出來、世界の大勢は略ぼ確定するのであるから、群小の弱國は遊星の周りの衛星の如く、自然大勢の向ふ所に隨從するであらう。

されば先づ世界大共和國の第一歩として、强國聯合の世界常置大議院を組織するはあながち詩人の夢想ではあるまい。それは實際に出來得べき緊急事項で

ある。各國は人口と領土に應じて相當の代表者を此議員たらしめるのであるから、判斷の公正は勿論、各其利害を充分に辯明する自由を持てることは明かである。此議院は先づ第一に軍備全廢の條件として如何なる國際的紛擾をも全然此萬國代議院の討議と判斷を仰ぎ、各國は之に絶對服從の義務を宣誓せねばならぬ。

四　世界主義の發展

兵備の全廢は其消極的一面であるが、我が萬國代議院の爲すべき積極的の事業は澤山ある。先づ第一に關稅の全廢。そは關稅が單に國家的地方的なるのみではなく、生產稅にあらずして消費稅なるが故に、少數の資本家に篤くして、大多數の消費者に薄き不平等的非民本的の惡稅なるが故である。關稅の全

廢は財貨の流通を敏活ならしめ、從て社會的交通の頻繁は世界兄弟主義の發展に資する所幾何なるか知れぬ。

第二に決定すべきは度量衡の均一である。殊に通貨の均一は世界各國を通じて財貨交換の標準を一定せしめ、交換標準の一致は各國を通じて物價の均等に近づかしめ、物價の均一は勞銀の均一を馴致し、遂に各國を通じて富の程度、生活の標準を略ぼ同一ならしめるであらう。生産の分配を平等ならしめる爲め、國際間通貨均一の致す經濟的利益は私の喋々を俟たずして、世界的社會主義者の等しく認むる所である。

第三は言語の統一である。但しそは政治上社會上の難關で、一朝一夕に行ふことは出來ぬが、一の標準語を採用して（エスペラントの如き生命なき作爲語よりも既存の言語の内最も良好なる一國語を採用して）世界語となし、各國は

國民教育百年の大計を樹て、徐々學校教育の方面より進行し往かば、一二世紀の間には必ず實現し得らるべきものである。現今國際戰爭の原因の主なる一とつは言語の異りより生ずる意志疎通の缺陷である。日本人が悉く英語を喋り得るやうであつたならば、日米問題なんか決して起りはしない。國際間の紛爭は往々猜疑の間に暗鬼を生じて遂に大事に至ることが多いのである。言語の統一は旦夕に實現し難い事とは云へ、自然の成行に任せ置くことは出來ぬから、爲政者は天下後世の福利を豫見して、政治上からも言語統一の運動を忽諸に附してはならぬ。

德教家、宗教家は内的に個人の方面から全人類の和親、世界同胞主義の鼓吹に努め、爲政家、經世家は外的に社會の方面より萬國代議院の組織と軍備の全廢、度量衡貨幣の均一、言語の統一等其他萬般の社會改良事業により國際間の